

大胡町発掘調査報告Ⅱ

勢多郡大胡町堀越

殿町遺跡

(大胡郵便局局舎新築に伴う事前埋蔵文化財発掘調査報告)

1983

群馬県勢多郡大胡町教育委員会

序 文

大胡町教育委員会

教育長 山 口 勝 雄

最近の宅地開発のキャッチフレーズとして「詩情豊かな城下町」として大胡町が表現されている様に、大胡の存在がいかに大胡城を中心として繁栄してきたか理解ができるよう。しかし去年の風水害によって、人災を引き起こそうかと思われるほどの災害によって城址の一部が崩壊し、町の象徴的存在である「大胡城址」は、その姿の一部に変貌を来すにおよび、往時の姿を保ち栄光の過去を持った「大胡城」の形状をいかに保つかが、現時点における重大な問題である。したがって大胡城関連の遺跡も同様に考えねばならない。開発という行為の裏に存在する破壊によって失われていく文化財を念頭に置き、その記録保存に万全を尽くし、広く町民に過去の文化遺産を知らしめねばならない。

今回は、大胡郵便局舎新築にあたり、武家屋敷跡の一画を調査し、記録報告を発刊する事は大胡城関係の遺跡を考える上で、重要な調査であった事を痛感する次第であり、御協力いただきました方々に深甚の謝意を表わしてあいさつといたします。

昭和58年3月

例　　言

1. 本書は群馬県勢多郡大胡町堀越字殿町1194-1番地所在の「坂町遺跡」の発掘調査概報である。
2. 発掘調査は大胡郵便局舎新築事業工事にあたり、関東郵政局の委託を受け、大胡町教育委員会が主体となり実施したものである。
3. 発掘調査期間は昭和57年11月20日から12月26日までである。
4. 発掘調査は大胡町教育委員会文化財担当、山下歳信が行なった。
5. 遺物整理は山下歳信が中心となって行ない、遺物実測は町田蘭子、遺物の拓本、遺構及び遺物のトレースは蓑輪アキ子、小沢幸代、立川くに、写真撮影は山下歳信が担当した。
6. 本書の執筆、編集は山下歳信が行なった。
7. 発掘調査及び報告書作成にあたり下記の方々のご協力をいただきました。

関東郵政局建築部管理課、御坂本工務店、スナガ環境測設株式会社、青高館航空写真、前橋市教育委員会、文化財保護係 福田紀雄、他

〈発掘参加者〉

小沢幸代 立川くに 町田蘭子 蓑輪アキ子 星野うめ 石井米子 小沢千鶴子
千葉俊江 奥野富子 青木迪代 松村民子 市川あや子 (順不同)

目 次

序 文	大胡町教育委員会・教育長・山口勝雄
例 言	
挿図目次	
図版目次	
1. 調査に至る経過	1
2. 大胡城址の立地と歴史的概観(城郭史概略)	1
(1)大胡城の基盤的存在	1
(2)養林寺館址と近戸曲輪(近戸砦)	3
(3)旧大胡城	4
(4)近世城郭としての大胡城	4
(5)大胡城解体	5
3. 大胡氏並び大胡城関係年表	7
4. 発掘調査の概要と経過	9
(1)主な検出遺構一覧	11
(2)H-1	12
(3)土 倉	13
5. 出土遺物	14
(1)平安時代の出土遺物	14
(2)カワラケ	19
(3)16~17世紀頃の出土遺物	22
(4)こね鉢、ほうろく、火舎類	23
(5)摺 鉢	27
(6)石製品	27
(7)近世以降の陶磁器	27
6. 酒井家資料について	33
7. 結 語	36

挿図目次

第1図	大胡城址と周辺遺跡	2
第2図	大胡城と菱林寺館	6
第3図	旧大胡城	6
第4図	殿町遺跡全体図	10
第5図	H-1 実測図	12
第6図	土倉実測図	13
第7図	平安時代の出土遺物実測図(1)	16
第8図	" (2)	18
第9図	カワラケ実測図(1)	21
第10図	" (2)	22
第11図	16~17世紀頃の出土遺物実測図	23
第12図	こね鉢、ほうろく、火舎等実測図(1)	24
第13図	" (2)	25
第14図	" (3)	26
第15図	摺鉢実測図	28
第16図	石製品実測図(1)	29
第17図	" (2)	29
第18図	近世以降の陶磁器実測図(1)	31
第19図	" (2)	32
第20図	17世紀頃の大胡城下図	35

図版目次

P L 1	大胡城下絵図(酒井家資料)	37
P L 2	" 調査地点付近	38
P L 3	調査区全景	39
P L 4	1 T、2 T、E 3 等	40
P L 5	E 4、E 5、3 T 全景、E 6 等	41
P L 6	3 T 東側、D 2、D 3、灰釉陶器出土状況	42
P L 7	3 T 西側より、D 5、E 8、H-1、長頸甕出土状況	43
P L 8	土倉、E 11、4、5 T	44
P L 9	平安時代の出土遺物	45
P L 10	カワラケ	46
P L 11	16~17世紀頃の出土遺物、石製品、古銭	47
P L 12	摺鉢、こね鉢、土鍋、ほうろく	48
P L 13	ほうろく、火舎、五徳	49
P L 14	近世以降の陶磁器	50
P L 15	近世以降の陶磁器	51

1. 調査に至る経過

昭和56年東京郵政局建築部設計課より、吉田、中川両氏が、大胡町教育委員会に来庁。勢多郡大胡町堀越字殿町1194-1番地に大胡郵便局移転に伴い、新局舎建築の予定があるので、文化財関係の問題を対処すべく協議、昭和57年10月、関東郵便局建築部の平岡氏を中心として、概当地区的文化財について協議、大胡城武家屋敷跡の為、事前に記録保存のための発掘調査を実施する事で、昭和57年11月12日付で、大胡町教育長・山口勝雄、関東郵便局長・加藤祐策の間に委託業務が締結され、昭和57年11月20日～12月26日の間、大胡町教育委員会が主体者となり、主事山下歳信が、調査担当者として実施した。

大胡町堀越字殿町1194-1番地は、酒井家資料大胡城下絵図でも明確に記載されるように武家屋敷、並び長屋の一部に概当する地区である。現在の大胡中学校校庭の西側を南北に走る道路をへだてた、深沢医院の北側の一画である。この地点は侍屋敷内を東西南北に走行する道路の交差地点で、T字形に用水路が南下、東下している。調査区は、桜木椎兵衛の屋敷跡である。

2. 大胡城址の立地と歴史的概観

大胡城址は勢多郡大胡町河原浜660-1番地に所在する。大胡町は「すそのは長し赤城山」(上毛かるた)の赤城山南麓の裾野に立地した南北約長10km東西約5kmの町で、赤城山より、放射状に伸びる台地と低地の繰り返す町である。町中央部を流れる荒砥川は、右岸の台地を侵食しながら正治から東小路にかけてみられる急崖を形成する。この急崖を利用して、築城されたのが大胡城で、根古屋との比高差は10m前後を測る。城址は、北から南へやや孤城を呈する台地で、東側は荒砥川、西は風呂川によって挟まれる舌状台地端に築城されている。比高は近戸曲輪185m秋葉曲輪165mなどを測り、傾斜度は3.2%前後と緩慢の台地で、本丸は180m前後の標高である。

では、大胡城の成立する過程を城郭史から概略を述べてみよう。

(1) 大胡城の基盤的存在

大胡氏は、鎌倉時代に成立した軍記物語(注1)の中で、上野武士を記載する場合にいつも冒頭に登場し、赤城南麓の在地領主の筆頭格としてあげられ、鎌倉殿の御家人として、その活躍が吾妻鏡(注2)に記されている。

この大胡氏の基盤となった大胡郷(注3)は、大胡町を頂点として荒砥川流域、旧利根川の河道沿い、またこの河道低域の微高地に形成された村々を囲む広大な地域に及ぶのである。この広大な地域は、荒砥川水系を基盤として、鎌倉時代以降に旧利根川河道地域内を開拓していくと考えられる。

では、大胡氏の本拠地はどこであろうか。上記した大胡郷内の開拓の基盤となった荒砥川水系の集落は、現在の大胡から今井、小島田に至る間で、古墳群地帯として、古くより文化の発達し



第1図 大胡城址と周辺の遺跡

- 1. 大胡城址(県指定史跡)
- 2. 殿町遺跡(発掘地点)
- 3. 豊林寺館址
- 4. 堤越古墳(県指定史跡)
- 5. 榴荷塚古墳(町指定史跡)
- 6. 天神風呂遺跡
- 7. 天神A・B地点遺跡

た地域もあり、小嶋田は郡の政庁（郡街）の所在を推定する。（注4）こうした荒砥川水系の歴史的意義を考えると、本拠地は、やはり大胡から今井、小嶋田間に存在するのであろう。では、大胡郷の地頭職、郡司職、鎌倉殿の御家人という性格をもつ大胡氏の屋敷はどこにあったのか。現在、大胡～今井、小嶋田間に存在する城館跡で、中世豪族の居館址に概当するものは、大胡町堀越に残る養林寺内の館址で、現在は、堀と土塁の一部を残すのみであるが、所謂方形の館址として知られる所である。（注5）大胡氏の大胡郷の拡大は段丘上の集落から、旧河道低地へと発展する過程で、荒砥川水系の低地を避け、安全地帯に基盤を定着させ、北から南の低地へと開発を進行させていったのであろうか。

注1

平治物語 卷第一（源氏勢太への事）

～上野国には大胡、大室、大類太郎～

義經記（頼朝謀反の事）

～上野国には大胡太郎、山上さゑよりの小太郎重房、同三郎重義、党には丹、横山、猪俣
馳せ参る。～

平家物語 卷第五（橋合戦）

～つゝく人共、大胡、大室、深須、山上、那波太郎、佐貫庄綱四郎太夫、小野寺禅師太郎、
辺屋この四郎、郎党には～

注2

大胡氏関連の年表を参照

注3

大胡郷は、現在の大胡町付近を頂点にし、荒砥川の流域を一辺とし、旧利根川の河道沿いの箕
井・長磯・小屋原・今井・大島・片貝・野中・小嶋田等の集落を底辺とした扇状の土地で、上
泉・沖・三俣・幸塚・小嶋田・箕井・小屋原・長磯・大島・野中・片貝等の集落を含む広大な
地域と考えられる。

注4

勢多郡誌参照

注5

大胡町誌及び群馬県古城址の研究（上巻）山崎一著参照

(2)養林寺館址と近戸曲輪

大胡郷支配拠点として、養林寺館址を築くが、動乱が激しくなると、有事の際戦斗の拠点を、
築き、居住地と戦斗地の関係が生じ、所謂根小屋式城郭の形を作り出すのである。この前進的形
態が養林寺館址と近戸曲輪であろう。養林寺館址は、居住地としては、安定した地点といえるが
いざ戦斗となれば、台地の中央部付近に、位置する為、弱さを見せよう。この点をカバーするに

は、近い距離に詰の城を築くのが好都合である。この詰の城の選地として考えられるのが、大胡城の別城一郭的存在の近戸曲輪である。近戸曲輪は、大胡城址の最北部の曲輪で、館址北東方向120m程の距離にある。荒砥川の侵食により、東は段崖状となり、西は荒砥川支流の風呂川に挟まれ、台地が一番くびれる個所であり、曲輪南面は窪地状となっていた為、北面に堀切りを設けるだけで砦化する地点でもあり、距離的にも、戦斗地としても利に適う所である。館址を、平時の屋敷地として、有事には、近戸曲輪を戦斗地としていたのであろう。

(3)旧大胡城

現在の根古屋部落とその背後の段崖部を繩張する現大胡城に近い形状である。関東に於ける情勢変化が日々一転する戦国期、養林寺館址と近戸曲輪の関係から大きく脱皮し、所謂戦国期特有の根古屋式城郭の開花させる。

故、福島武雄氏の大胡城考で、三ノ郭（三ノ丸）の東側と四の郭（南曲輪）の東側北半分には一間程の腰曲輪があって、連続していたようになっている。云々と記している。現在では、その中央部に三ノ丸と南曲輪を分離する堀切りが存在する為、この堀切り以前のもので、三ノ郭と四ノ郭が一郭であったと推定し捨て郭の存在を指摘している。西曲輪（現ブル）に於いて、三ノ丸西側に走行する風呂川の旧水系がある時期に於いて、三ノ丸か南曲輪の一部を削り、埋土として利用されている状況が検出され、西曲輪一帯が多量の砂利で覆われている事が、昭和56年西曲輪にブル建設の際、調査した結果判明し、天正十二年人馬二百余流失する大水害を起している記事（赤城神社年代記）と考えられる。また役場建設に伴う調査では南曲輪の北西コーナー付近で虎口が検出されているが、三ノ丸南曲輪が分離されていなければ使用のないものである。この様に故、福島氏の推論が的確であった事が理解できる。この捨曲輪の分離は、天正十二年以後のものと考えられ、やはり牧野氏の普請であろう、荒砥川と台地郭間の平坦部の根古屋は、平時の居住空間を設けており、土壘によって囲郭されている。この囲郭は、荒砥川の氾濫を防ぐと共に居館の防御的要素をもつものであろうか。台地郭は北より近戸曲輪、北城、本丸、二ノ丸、捨曲輪の五郭による並部式の繩張りをとるが、近戸曲輪と捨曲輪を除くと本丸を中心として東に根古屋、西南に二ノ丸、北に北城と囲郭式の繩張りを作り出している。

(4)近世城郭としての大胡城

近世城郭として大胡城が整備されたのは、天正十八年小田原の役後の牧野氏の入城によって始まり、牧野氏越後長峰に転封（1616）の26年間ほどに亘る。天正十八年の牧野康成公、大胡藩二万石（注6）城主として入城した後、城郭整備と共に城下町整備を遂げる。城郭部整備として以前の所謂搔き上げ城による繩張りの虎口に石垣を使用するのが第一の特徴であろう。現存する二ノ丸の枡形門、北城の虎口、南曲輪に於ける虎口は枡形の形式をもつもので、石垣によって構成される。本丸を二分する石垣も、牧野氏の構築であろう。第二の特徴は、城郭の強化として捨曲輪を廃し、三ノ丸、南曲輪を設けると共に、根古屋周辺部の拡張、西曲輪の設定、第

三の特徴は、城郭の強化と共に、城下町整備として風呂川を、二ノ丸、三ノ丸間に流し、その一部を用水として使用する為に本町に流している。第四の特徴は、家臣団の居住区を整備し、現駿町地区に侍屋敷を設定するのである。こうして南北630m、東西幅330mほどの城郭を完成したのである。

(5)大胡城解体

元和二年、牧野忠成、越後長峰の転封後、前橋藩領に編入。酒井家領となり、大胡城の建物は大胡衆（注7）により、前橋城内の建物として利用する為移築され事實上城の機能を失うのである。この大胡在住の家臣の為に前橋城の藩学として、元禄13年に求知堂（注8）を建てる。その後、寛文九年、前橋城代が置かれ、大胡組から大胡目付（注9）の支配するところとなり、酒井氏の寛延二年（1749）の姫路転封と共に廢城となったのである。この間、高須主殿を頭とする大胡組は、牧野氏時代の侍屋敷跡を利用していたのである。

大胡城の成立過程

(1) 大胡氏館	12世紀前後
(2) 妙林寺館址と近戸曲輪（近戸砦）	14世紀頃か？
(3) 戦国期、根古屋式城郭	16世紀前後頃
(4) 近世城郭	16世紀後半～17世紀初頭
(5) 大胡城解体	18世紀半ば

この様に鎌倉期前後より大胡氏の台頭に始まり、650年間の18世紀半ばまで榮枯盛衰を繰り返して来たこの地は、その後、商用、信仰の旅人の宿場として繁栄し、大胡の市日（三、八の日）には、糸蔵商で町中がごったがえし、又、家畜市の場として賑やかな時期を経て現在に至る。

注6

牧野氏の所領は、宮闇村、滝窪村、堀越村、樋越村、横沢村、茂木村、河原浜村、上大屋村の現大胡町に加えて、前橋市に属する旧桂萱村の荻窪、石間、堀の下、亀泉、江木、旧木瀬村の小島田、笠井、小屋原、上増田、下増田及び旧荒砥村全村を含み、東方では新里村の板橋、関、山上、鶴ヶ谷、奥沢、大久保、柏川村の室沢、月田、中村、膳、東田面、西田面、一日市、女淵、深津と三夜沢を除く全村。（勢多郡誌参照）

注7

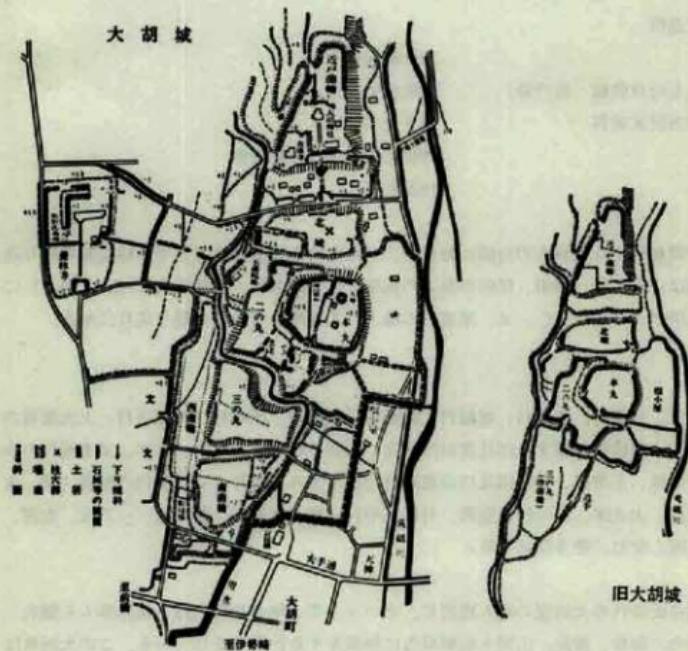
大胡衆は、酒井氏時代の大胡領の給人集団で、そのリーダー格が高須主殿（後に隼人を襲名）であり、大胡城内の御殿、書院、広間を前橋城内に移築をする仕事等をしている。この大胡衆は「直泰夜話」では八十人余とあり、又、「姫陽秘鑑」では拾人余と記している。

注8

藩学「求知堂」は、大胡在住の家臣の武芸、学問の為に建てられ、稽古日には大胡目付が出席し、指南役として服部兵助、蟻川喜左衛門、市川源七、細野幸助、篠崎庄之助等がいた。現在、この地は、茂木寅次氏と町田義午郎氏宅の場所となっている。

注9

寛文9年(1669)に「是歳初メテ城代ヲ置ク」。この前橋城代の設置改革で、高須隼人組から大胡目付の支配に変わったと考えられる。



第2図 大胡城と養林寺館(大胡町誌)

第3図 旧大胡城(大胡町誌)

3. 大胡氏並び、大胡城関係年表

建久元年	(1190)	頼朝入洛の行列、後陣隨兵十一番 大胡太郎	(吾妻鏡)
同 六年	(1195)	頼朝の東大寺供養のため供奉人 隨兵 大胡太郎	(〃)
"	(〃)	大胡、佐貫之輩足利の宿所に馳参	(〃)
"	(〃)	大胡小四郎 吉水の禅室に参じ 法然に帰依す (法然上人行状絵図)	
"	(〃)	大胡太郎実秀、父のあとを追い念仏に帰依し〇間 を小田原の蓮生を使者として法然に質問し、法然答える。	(〃)
元治元年	(1199)	法然、大胡太郎実秀、及びその妻室へ返事を送る。	(和語燈錄)
暦仁元年	(1238)	將軍、頼経上洛の隨兵、七番、大胡左衛門次郎 大胡弥次郎	(吾妻鏡)
仁治元年	(1240)	將軍二所參詣行列。先陣隨兵 大胡左衛門尉	(〃)
寛元四年	(1246)	大胡五郎光秀の告訴によって、萩原遠直、同資盛の所領を召放す	(〃)
"	(〃)	鶴岡放生会・將軍御出行列先陣隨兵 大胡五郎	(〃)
建久二年	(1250)	閑院内裏造営の負担として茶地分一本を幕府より課せられる	(〃)
"	(〃)	鶴岡放生会に供奉 大胡五郎	(〃)
正嘉二年	(1258)	大胡掃部助太郎 二所參拝の時の供奉	(〃)
正元元年	(1259)	大胡小四郎秀村念仏に帰依し、この日脚気がもとで往生をとげる	(念仏往生伝)
正慶二年	(1333)	大胡一族、楠正成討伐のため、大番衆として出陣	
建武二年	(1335)	大胡郷野中村の地頭職を新田義貞が長楽寺へ寄進	(長楽寺文書)
正慶二年	(1365)	大胡掃部助秀能 常陸国岩瀬郷の供米押領について 請文を提出する。	(鹿島文書)
応安六年	(1373)	大胡治部少輔秀重 大胡郷内神塚村、堀口村の田畠在家を 長楽寺大通庵に売却する。	(長楽寺文書)
永徳二年	(1382)	大胡上総入道跡、闕所地として、上野国守護上杉氏に安堵される。	(上杉家文書)
天文十三年	(1544)	大胡勝行 宗參寺を建立。	
永禄九年頃	(1566)	新土壤城主増田繁政、大胡城代を勤める。	
元亀三年	(1573)	北条高広、応昌寺に寺領を渡し、赤城神社に守護不入を定める。	
天正十年	(1582)	大胡城主 大胡常陸介高繁 赤城神社に永樂錢一貫文寄進	(赤城神社古文書)
天正十二年	(1584)	荒紙川の氾濫で大胡城下において、人馬二百余流失する。	(赤城神社年代記)

- 天正十三年（1585） 赤城神社の守護不入を認める。
- 〃十七年（1589） 三夜沢、赤城神社の東宮の神官である奈良原氏親子のうち、どなたか大胡に引越し、近戸大明神を祭つて欲しいとの依頼。
- 〃十八年（1590） 德川家康、関東入国に際して、牧野康成、大胡二万石に封ぜられる。
- 慶長五年（1600） 江木郷のあらくの地をきりひらくように指示する。
- 〃（〃） 上田城攻撃
- 〃十四年（1607） 牧野康成公死去
- 〃十九年（1614） 牧野忠成、大坂の役に先鋒第五にいる。
- 元和二年（1616） 越後国長嶺に転封
- 〃（〃） 酒井忠世、大胡、伊勢崎の三万二千石を加賜する。この時大胡領は、前橋藩領に編入される。
- 寛文十一年（1671） 大胡目付の支配となる。
- 元禄十三年（1700） 求知堂が建てられる。
- 寛延二年（1749） 酒井氏姫路へ転封

(4)発掘調査の概要と経過

本遺跡の発掘調査は大胡町郵便局舎新築工事によって破壊されることとなった約2005m²を対象として行なわれ、昭和57年11月20日～12月26日間の期間を予定した。

当地は桑畠と一部菜園として利用されていたが、戦時中、学校の実習地としてイモ類を作っていた為、かなり遺構面は荒れていると考えられた。この為トレンチ発掘を計画し、遺構の状況に応じて拡張を考えたのである。トレンチは幅3mで、トレンチ間5mを設け、E-10°-S軸で計5本設定する。桑根等は重機によって除去したが、遺構検出面(ローム面)は浅い為、絶て人力によって調査を行なった。

11月20日 トレンチ設定、2T東側より掘り下げ開始。

11月22日～24日 イモ穴状掘り込み、柱穴、E-1～3、JD-1確認。

11月25日～26日 " E-4の確認。

11月27日～12月1日 E-5、イモ穴状掘り込み、柱穴等確認。

12月2日～5日 3T E-6・7の確認、D-1にて灰釉小皿の出土。D-2～4の確認。

12月6日～7日 E-8、D-5、耕作溝、イモ穴状掘り込み確認。

12月8日～9日 4T、柱穴群、土塙群の確認。

12月10日～13日 H-1の確認そして拡張、E-10その他の確認。

12月14日～15日 1T、5Tの掘り下げ、イモ穴状掘り込み、耕作溝、柱穴、E-1等確認。

12月17日～20日 5T、E-11、土倉の確認。

12月21日～23日 E-12等の確認。

12月24日～26日 全体精査並びに写真撮影。

12月27日 全体写真

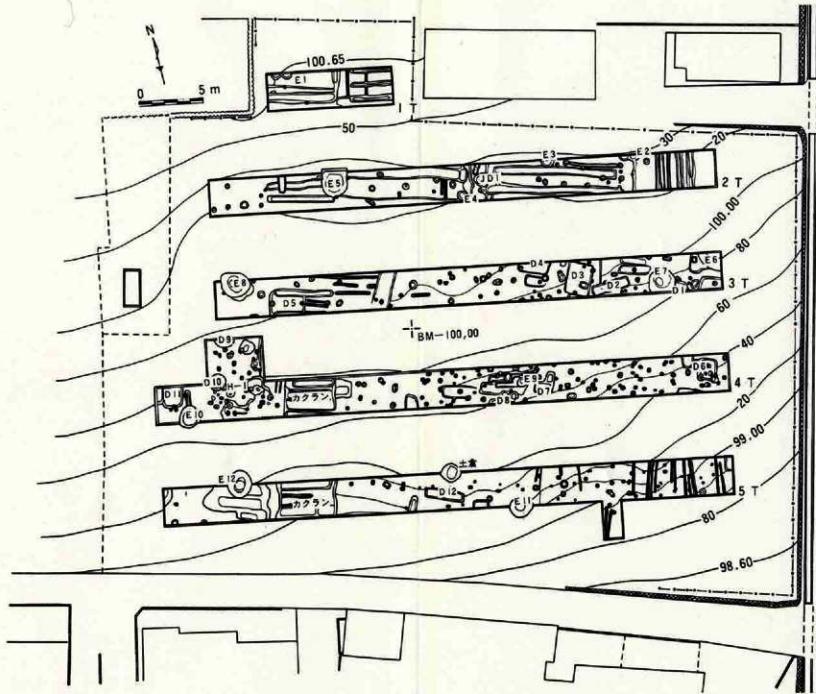
検出遺構

本遺構は、繩文、平安時代の遺構、遺物、並び17世紀前後～近現代に至る複合遺跡である。

繩文時代の遺構としては、土塙一基、石錐一本、土器片数点出土。

平安時代の遺構としては、住居址一軒、須恵坏、高台付碗、白瓷、長頸壺等が出土。そして円形土塙2基が検出された。

江戸期前後～近現代に至る遺構としては、井戸状遺構12本、長方形土塙、方形土塙等25ヶ所、土倉1ヶ所、イモ穴状掘り込み、溝状耕作溝、柱穴多数が確認され、カワラケ、土鍋、ほうろく、火舎、こね鉢、漬戸、美濃系陶磁器、明代の青磁、染付(青花磁)片、古銭、石製品、摺鉢、伊万里系、唐津系、京焼系等の陶磁器片が多数出土した。



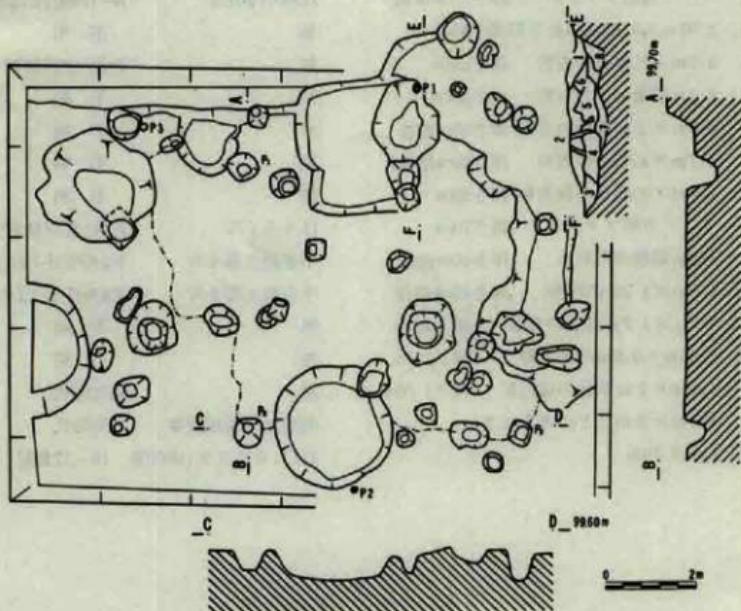
第4図 殿町遺跡全体図

(1) 主な検出遺構一覧

遺構No.	規模と形状	出土遺物	時代
E-1	0.8m×(0.8)mの円形 深さ0.92mまで確認	無	近世(江戸末期?)
E-2	1.05m×? の円形 深さ1.41mまで確認	無	(〃 末期?)
E-3	1.13m×? の円形 深さ2.33m	こね鉢、カワラケ	近世(江戸初期?)
E-4	1 m×0.9m の円形 深さ4.45mまで確認	青磁、カワラケ、古銭等	16~17世紀
E-5	2.15m×2.05mの円形 深さ3.6mまで確認	近世陶器多数	近世(江戸末期)
E-6	3 m前後の円形? 深さ3.12mまで確認	カワラケ等	近世(江戸初期?)
E-7	2.35m×1.9mの楕円形 深さ4.83mまで確認	古銭、カワラケ等	近世(江戸初期)
E-8	2.25m×2.15mの円形 深さ4.02mまで確認	鉄釉小皿等	16~17世紀
E-9	1 m×0.9m の円形 深さ1.52m	無	不明
E-10	1.7m×1.5mの円形 深さ4 mまで確認	平安期土器片、カワラケ片	(江戸初期?)
E-11	1.42m×1.7mの楕円形 深さ4.35mまで確認	カワラケ等	16~17世紀
E-12	2.45m×2.1mの楕円形 深さ3.6mまで確認	石臼、カワラケ等	不明
D 1	? ? 方形プランか? 2.深さ25cm前後	灰釉小皿出土	16~17世紀(E7より古)
D 2	2.95m×0.85mの長方形深さ43cm	無	不明
D 3	2.5m×1.95mの方形 深さ25cm	無	近世(江戸初期?)
D 4	2.4m前後×? の方形 深さ40cm	無	不明
D 5	2.9m×2 m前後の方形 深さ65cm前後	無	不明
D 6	1.7m×1.45mの方形 深さ20cm前後	無	不明
D 7	1.4m×0.85mの長方形 深さ30cm	無	不明
D 8	? 方形プランか 深さ70cm	ほうろく片	近世(江戸初期)
D 9	1.5m前後の円形か 深さ40cm前後	平安期土器小片	平安時代(H-1より古)
D 10	1.3m×1.2mの円形 深さ40cm前後	平安期土器小片	平安時代(H-1より古)
D 11	1.6m×1.7m以上の方形 深さ45cm	無	不明
D 12	2.95m×0.8mの長方形 深さ25cm	無	不明
J D 1	1.4m×1 m前後の楕円形 深さ1.05m	無	縄文時代
H-1	4.5m×5 mほどの方形プラン	須恵杯、長頸壺等	平安時代
土 倉	全長3.76m	石臼、カワラケ、染付等	16~17世紀

(2) H-1

H-1は、4T西部に検出され、規模確認の為、北側に拡張する。プランは、上面耕作によつて著しく乱れている為、明確を欠くが、カマド並びに東壁の一部分の僅かに残存する状況であり床面（一点鎖線）の広がりが追求できた事で、東西4.5m前後、南北5mほどの規模の方形プランが考えられる。東壁部から西壁方向に漸次的に黒褐色土の住居埋土が堆積する。壁は、東壁に僅かに確認され、壁高最大残存部で、30cmを測るが、北側につれて減少し、耕作によって、破壊される状況にある。床面は、非常にハードなローム面で、周濠は、確認出来ない。柱穴は、当住居址のものと考えられる。P1～P3の他に、近現代のものが多數重複する。P1～P2、P2～P3間は3mほどを測る。カマドは、上面が破壊されているが、東壁の南寄りに位置するものと思われる。土層は、1.ローム粒含む黒褐色土。2.斑点状にロームブロックを含む黒褐色土。3.斑点状にロームブロックを含む暗褐色土。4.焼土粒、灰褐色粘土を含む暗褐色土。5.4に似るが焼土粒、灰褐色粘土は僅か。6.斑点状に小ロームブロック粘土粒を含む。7.暗灰褐色粘土ブロックを含む暗褐色土。8.黒褐色土である。出土遺物は、カマド内にP1、西壁沿いにP2、東壁沿いにP3の出土等であった。

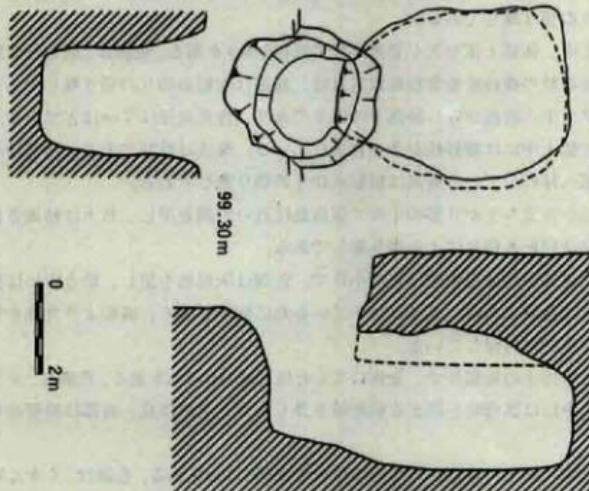


第5図 H-1 実測図

(3) 土倉

この遺構は、5T中央部北壁に検出されたもので、検出時は、円形の暗褐色プランであった為井戸口と考えられたが、入り口部立坑北壁に石臼を含む30m前後の礫によって、主体部を防いでいる状況が確認された。この封石は、主室天井と埋土の空間を防ぐ為のもので、立坑部分は、暗褐色土の堆積が、封石レベル下まで確認され、下層は、黒褐色土の埋土で、平安期の遺物片、土器、青花磁片が出土、主体部天井は、最上落部80mを測り、ロームBが堆積し、立坑と同様の黒褐色土堆積するが、立坑より主体部の床面が、緩やかに傾斜する部分のレベルより砂層と粘土層の互層が70m～80m堆積する。この砂層中には、カワラケが出土している。

規模は、全長3.76m、立坑（入り口部）は、1.65m×1.55mのほぼ円形プランで、トレッチ内確認面から深さ1.4m前後を測り、主体部は入り口部より開口して、やや胴張りの隅丸方形を呈し、最大幅2mを測る。断面は、所謂カマボコ状である。天井部から床面は、明確を欠くがロームの崩壊堆積から考えると、1.2m前後の高さであろう。この土倉には、前記したように、砂層の堆積が確認でき、水害等による堆積後、放棄され、ある時期に封石をもって埋土したものと考えられる。ではこの砂層はいつのものであろうか？大胡城下に於ける大水害は、赤城神社年代記による元正十二年（1584）の記録が見られるが、この頃は、武家屋敷割も完成しておらず、また用水路の完成も見られない。台地の中央部端で、風呂川との比高差は5mほどあり、やはり、用水路の完成後と考えられ、酒井家資料に、元禄十二年（1699）の大暴風雨の被害を記しているが、この時大胡周辺も同様に、かなりの被害があったのである。屋敷割も完成し風呂川からの用水路も完成していた事からもこの時代の可能性が強いと考えられる。



第6図 土倉実測図

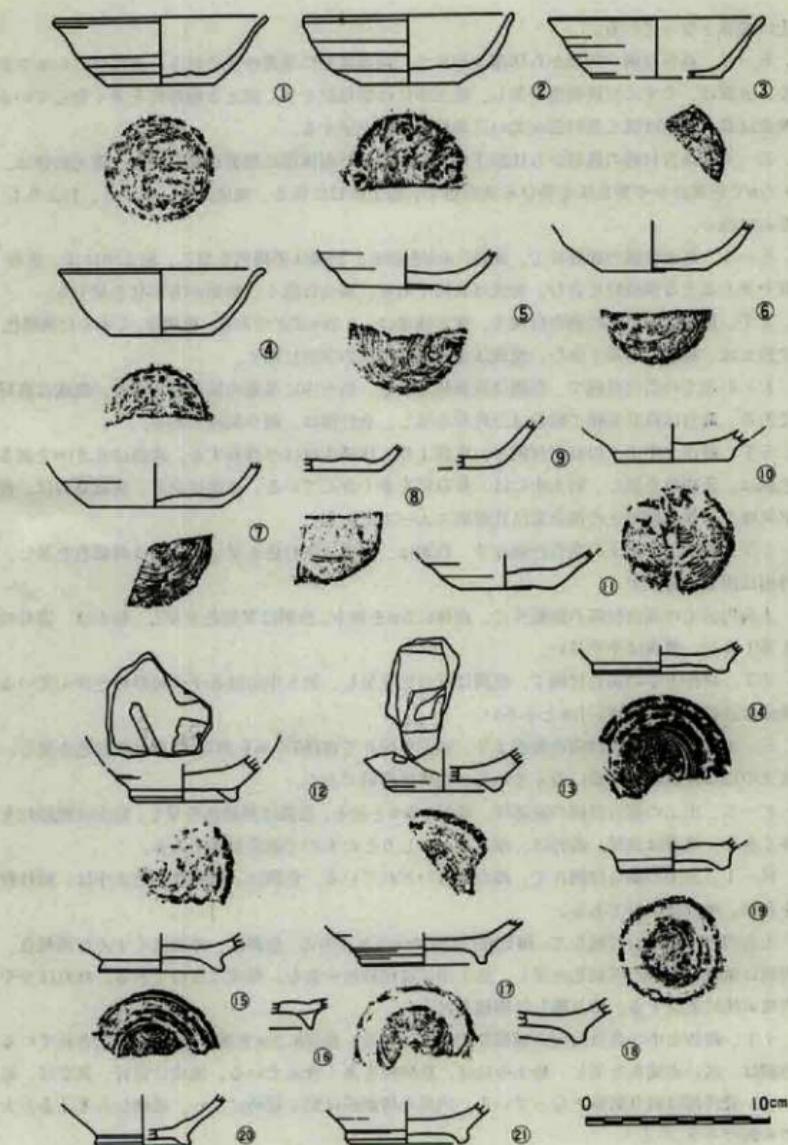
5. 出土遺物

(1) 平安時代の出土遺物

1. H-1 (P-2) 口縁部が少しほど残存する須恵不で、口径11.7cm、器高3.7cm底径5.8cmを測る。色調は灰褐色を呈し胎土中に多量の粗砂粒を含む。焼成は良好。底部は回転糸切りによる切り離して、立ち上がり部から口縁部につれ器肉を減らし口縁部はやや外反して開いている。内外面のロクロ痕はさほど強くない。
2. H-1 (P-1) H-1 のカマド内より出土、約半分残存する。須恵坏で口径11.6cm器高3.8cm底径5.4cmを測る。色調は青灰褐色を呈し、胎土も比較的精選されており細かい長石粒等が混入している。焼成は良好。底部は回転糸切りによる切り離して、立ち上がり部は開き気味で体部下位で内側を強めて口縁部に移行し口唇部を丸めている。内面底部と体部外面にロクロ痕を強く残す。
3. 土倉内出土、少しほどの須恵坏の破片であり復元口径11.8cm底径7.1cm器高3.3cmを測る。色調は灰褐色を呈し、胎土中には多量の粗砂粒を含む。焼成は良好である。底部は回転糸切りによる切り離して、体部は直線的に立ち上がって口縁部でやや開き気味となっている。
4. H-1、5点ほどの少片による復元で、約半分ほどの個体が残存する。口径11.3cm器高3.6cm底径5.6cmを測る。器形としては1と同じものであるが全体に薄手である。
5. E-5、体部上位を欠く須恵坏片で底径6.3cmを測る。色調は灰白色で胎土中には5mmほどの砂礫を混える粗砂粒が多く含まれている。焼成は良好であるが全体にざっくりとしている。底部は回転糸切りの切り離しである。
6. 2T、耕作土中、体部上位を欠く須恵坏片で底径5.8cmを測る。色調は、灰白色で胎土は精選され、雲母、長石粒の微砂粒を含む焼成は良好、底部は回転糸切りの切り離しである。
7. H-1、フク土中、底部から口縁部下の破片であり、復元底径は7cmほどである。色調はくすんだ灰褐色で胎土中には微砂粒が多く含まれている。焼成は良好である。体部は丸味を呈して内側し口縁部へ移行している底部は回転糸切りの切り離しである。
8. E-12、底部から立ち上がり部の少片で灰白色に近い色調を呈し、胎土は精選され焼成も良好である。底部は回転糸切りによる切り離しである。
9. 土倉内出土、底部から体部中位ほどの少片で、色調は灰褐色を呈し、胎土中には長石粒を含んでいる。焼成は良好である。底部はスレしている為に明確を欠く、底部より丸味を呈して立ち上がり部は直線的に内側している。
10. 3T、耕作土中出土の底部片で、全体にスレを呈し底径6.3cmを測る。色調は、くすんだ灰褐色を呈し、胎土中には雲母粒を混える粗砂粒を多く含む。焼成は良、底部は回転糸切りの切り離しである。
11. 3T、耕作土中、出土の底部から体部中位片で底径5.1cmを測る。色調は、くすんだ灰褐色を呈し、胎土中には粗砂粒を含んでいる。焼成は良好、底部は回転糸切りによる切り離しでやや

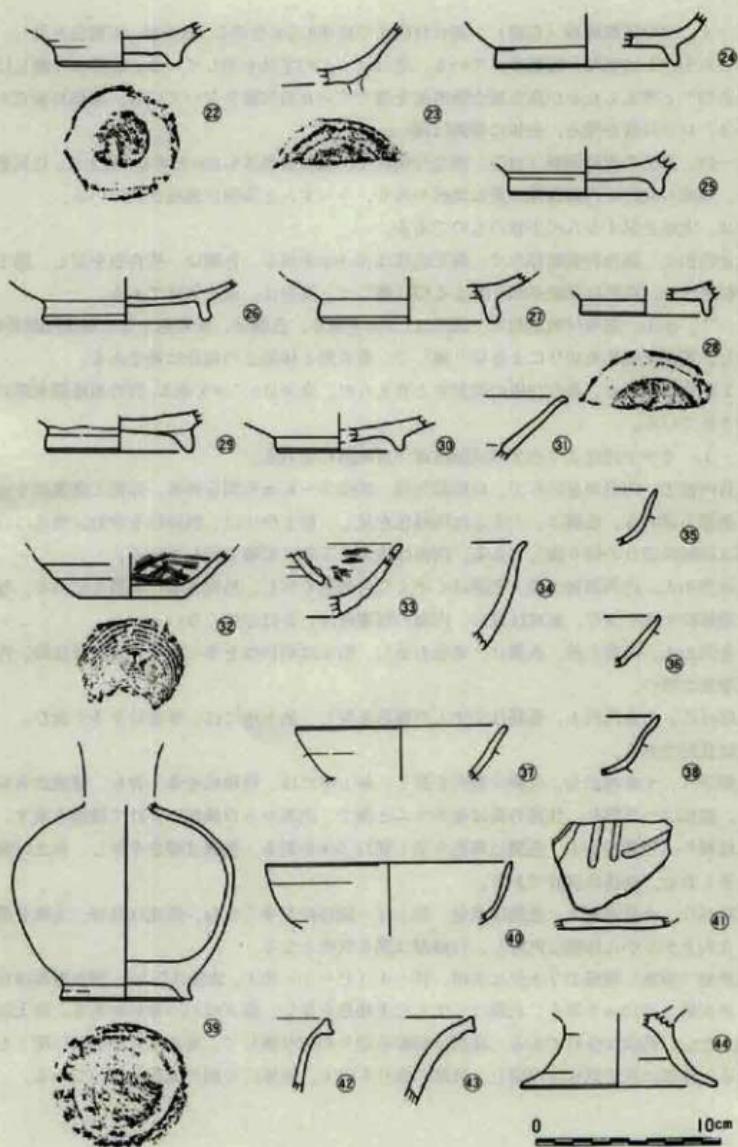
上げ底状となっている。

12. E-4、高台は碗の底部から体部下位片で、内面底部に墨書が見られる。底径は5.4cmを測る。色調は、くすんだ灰褐色を呈し、胎土中には雲母粒が多く混える粗砂粒を多く含んでいる。焼成は良。高台は低く疊付部が丸い三角形の断面を呈する。
13. E-4、高台付碗の底部から体部下位片で内面、外面体部に墨書が見られる。復元底径は、5.7cmで色調はやや黄色味を帯びる灰白色で、胎土は12に似る。焼成は良。高台は、12よりもさらに低い。
14. E-4、高台付碗の底部片で、底径7.4cmを測る。色調は黒褐色を呈し、胎土中には、雲母粒が多く混える微砂粒を含む。焼成は良好である。高台は低く、断面が方形状を呈する。
15. 3T、耕作土中出土の高台付碗で、復元底径は、6.7cmほどである。色調は、くすんだ黒褐色で胎土は、粗砂粒を多く含む。焼成は良、高台は八の字状に開く。
16. E-4 出土の高台付碗で、色調は灰褐色を呈し、胎土中に多量の長石粒を含む。焼成は良好である。高台は直立気味で断面は三角形を呈し、疊付部は、銳り気味である。
17. 5T、耕作土中出土の高台付碗で、底部より、体部中位ほど残存する。底径は6.8cmを測る。色調は、灰褐色を呈し、胎土中には、長石粒を多く含んでいる。焼成は良好、底部高台は、直立気味で、体部外面との接合面は比較的スムーズである。
18. 2T、耕作土中出土の高台付碗片で、色調は、内面は灰白色を呈し、外面は黒褐色を呈し、外面は黒褐色を呈す
19. 土倉内出土の高台付碗の底部片で、直径6.2cmを測る。色調は黒褐色を呈し、胎土は、雲母粒を多く含む。焼成はやや甘い。
20. 2T、耕作土中の高台付碗で、色調は灰白色を呈し、胎土中には若干の粗砂粒を含んでいる。焼成は良好、復元底径5.1cmと小さい。
21. E-4、出土の高台付碗の底部より、体部中位片で底径5.9cmを測る。色調は灰白色を呈し、胎土中には粗砂粒を多量に含んでいる。焼成は良好である。
22. E-5、出土の高台付碗の底部片、底径5.9cmを測る。色調は黒褐色を呈し、胎土は粗砂粒を多く含む。焼成は良好。高台は、厚く、どっしりしたもので直立気味である。
23. H-1、出土の高台付碗片で、高台部はハガれてい。色調は、灰褐色で胎土中は、粗砂粒を含む。焼成は良好である。
24. 土倉内出土の高台付碗片で、復元底径は9.8cmほどである。色調は、外面はくすんだ黒褐色、内面は黄味がかった灰褐色を呈し、胎土中には粗砂粒を含む。焼成は良好である。高台はやや内壁気味に直立する。切り離しは明確を欠く。
25. 4T、耕作土中の高台付碗の底部片で内黒である。底径8.2cmを測る。器面が酸化されている。色調は、淡い赤褐色を呈し、胎土中には、粗砂粒を多く含んでいる。焼成は良好、高台は、直立し、疊付部は銳り気味となっている。内黒の研磨痕は弱く認めにくい。底径から考えると大型の碗だろう。



第7図 平安時代の出土遺物実測図(1)

26. E-4、出土灰釉陶器（白底）、高台付碗片で底径8.6cmを測る。胎土は、灰褐色を呈し、内面の立ち上がりに灰釉が施釉されている。高台は、くの字状を呈している。底部切り離しは、回転糸切りと考えられるが高台接合後底部を撫でている為明確を欠いている。体部外面立ち上がりは、ロクロ痕が残る。全体に器肉は薄い。
27. E-12、出土の灰釉陶器（白底）高台付碗片で、復元底径は9.2cmを測る。胎土は、白灰色を呈し、焼成も良好で内面底部に重ね焼痕が残り、うっすらと灰釉が施釉されている。高台は、丸味を呈する八の字状のものである。
28. 土倉内出土、高台付碗底部片で、復元底径は6.9cmを測る。色調は、灰白色を呈し、胎土は、微砂粒を含む。底部は回転糸切りによる切り離しで、高台は、直立気味である。
29. E-7、出土、高台付碗底部片で底径は7.7cmを測る。色調は、灰白色を呈し胎土は微砂粒を含む。底部は回転糸切りによる切り離しで、高台部と体部との接合は雑である。
30. 2T耕作土中出土、高台付皿の底部片と考えられ、底径は6.7cmを測る。内外面底部を除いて施釉されている。
31. H-1、カマド付近より出土の灰釉段皿の口縁部片である。
32. 土倉内出土、内黒須恵環片で、口縁部欠損、底径5~6cmを測る外面、体部と底部にうっすらと墨書を認める。色調は、くすんだ灰褐色を呈し、胎土中には、粗砂粒を含む。焼成は良好。底部は回転糸切りの切り離しである。内面は内黒で丁寧に研磨を施している。
33. 土倉内出土、内黒墨書き土器、色調はくすんだ黄褐色を呈し、外面体部に墨書きを認める。胎土は、微砂粒を多く含む。焼成は良好、内面の研摩痕は、さほど強くない。
34. 土倉内出土、内黒土器、色調は、褐色を呈し、胎土は粗砂粒を多く含む。焼成は良好、内面の研摩痕は弱い。
35. 土師环片、土倉内出土、色調はくすんだ褐色を呈し、胎土中には、雲母粒を多く含む。焼成は良好である。
36. 土師环片、土倉内出土、色調は褐色を呈し、胎土中には、粗砂粒を多く含む。焼成は良好である。底部はヘラ削り、体部外面は指オサエと撫で、内面から口縁部にかけて横撫を施す。
37. 土師器片、土倉内出土、色調は褐色を呈し径11.5cmを測る。色調は褐色を呈し、胎土は粗砂粒を多く含む。焼成は良好である。
38. 土師环片、土倉内出土、色調は褐色、胎土は、微砂粒を多く含む。焼成は良好、丸味を帯びる。立ち上がりから体部は内側に傾き、口縁部は開き気味となる。
39. 長頸壺（須恵）頭部より上位は欠損、H-1（P-3）出土。底径は7.1cm、残存器高は10.8cm、胴部最大径12cmを測る。色調はくすんだ黒褐色を呈し、斑点状のハガレがある。胎土は粗砂粒を含む。焼成は良好である。底部は回転糸切りの切り離しで、高台は八の字状に開くものである。体部は直立気味に内側に傾き、肩部の張りも弱く、全体に寸胴の体部を呈している。



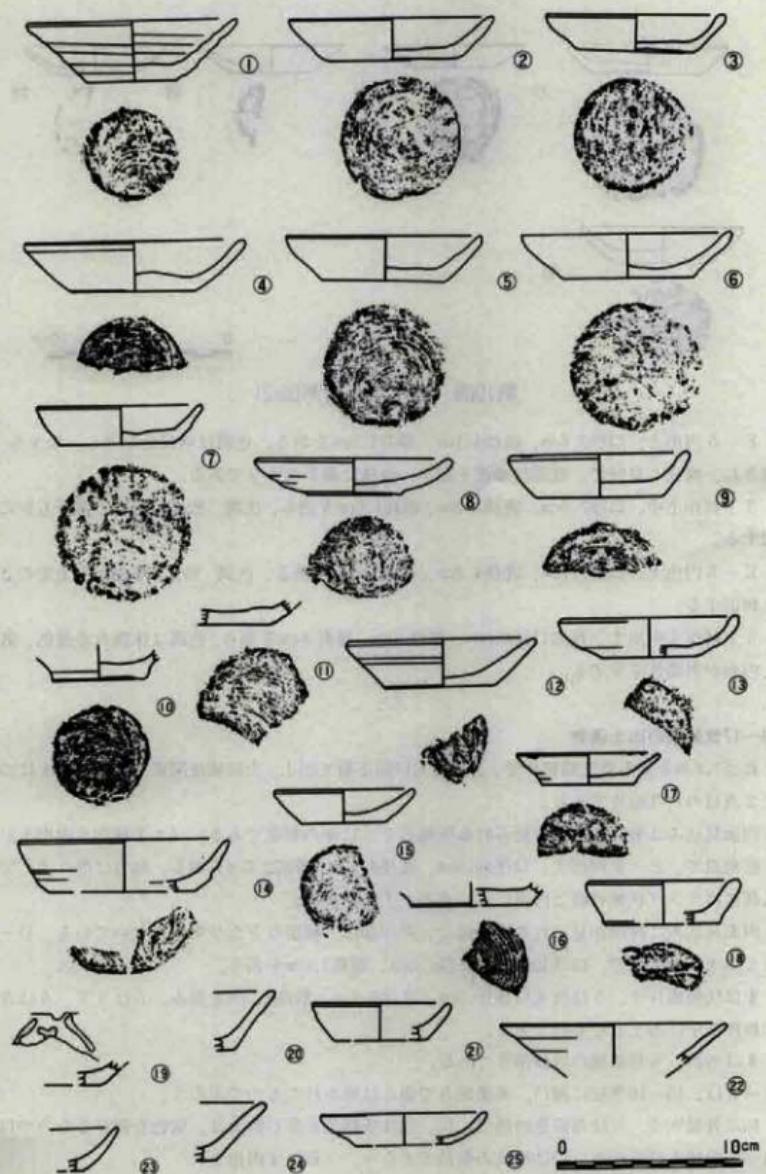
第8図 平安時代の出土遺物実測図(2)

40. 土師壺片、土倉内出土、復元口径、13.4cmを測る。
41. 土師壺底部片、土倉内出土、内面に墨書有り、底部ヘラ削り
42. 長頸壺、口縁部片、E-6出土の小片である。灰釉陶器で、内外面に薄く釉が施されている。内外面に黒斑が見られる。
43. 須恵壺、口縁部片、3T耕作土中出土。
44. 脚台付甕、脚部片、4T耕作土中出土。

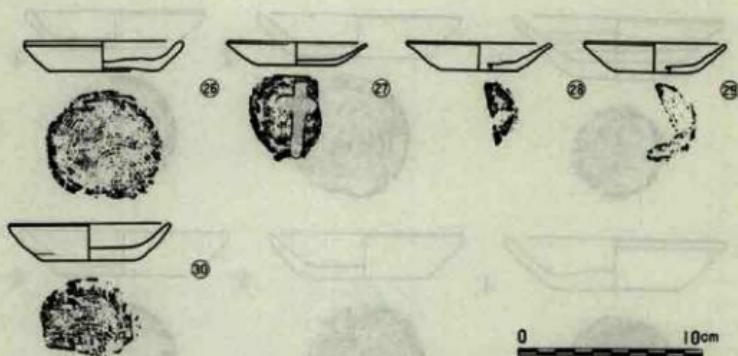
(2)カワラケ

1. 土倉内出土、口径11.5cm、底径4.8cm、器高3.4cmを測る。色調は外面黒褐色～くすんだ黄褐色、内面、くすんだ黄褐色、胎土中には微砂粒を多く含む。焼成は良好、底部は回転糸切りによる切り離しである。体部内外にロクロ痕が強く残る。体部は逆八の字状に開く。
2. 土倉内出土、口径11.2cm、底径7cm、器高2.3cmを測る。内外面のスレが著しい。色調は淡い黄褐色を呈し、胎土は、粗砂粒を多量に含んでいる。体部中位に軽いロクロ目を残し内側して口縁部へ移行、口唇部は、やや鋭り気味に丸めている。
3. E-5内出土、口径9.8cm、底径6.3cm、器高2cmを測る。色調は外面はくすんだ黒褐色、内面黄褐色を呈し口唇部に燈心痕が認められる。胎土は微砂粒を多く含む。焼成は良好である。底部は回転糸切りによる切り離しで体部は、中位まで斜方向に開き口縁部は、内側して器肉を肥大させている。
4. E-4内出土、口径13.1cm、底径6.5cm、器高2.7cmを測る。色調は暗褐色を呈し胎土中には粗砂粒を多く含む。焼成は良好である。底部は回転糸切りによる切り離しで、体部は直線的にスムーズに内側する。
5. 4T耕作土中の出土、口径10.7cm、底径6.6cm、器高2.5cmを測る。色調はくすんだ黄褐色を呈し、胎土中には粗砂粒を含み焼成は良好である。底部は回転糸切りによる切り離しで体部は全体にスムーズに直線的に内側している。
6. E-6内出土、口径11.2cm、底径6.9cm、器高2.4cmを測る。色調は橙色味を帯びる。黄褐色で胎土中には、粗砂粒を多く含む。焼成は良好、底部は回転糸切りによる切り離しで体部は立ち上がり部が、やや開き気味となり、口縁部は内側して口唇部を丸めている。
7. 土倉内出土口径9cm、底径6.1cm、器高2.1cmを測る。色調は、内面赤褐色外面は赤褐色～くすんだ黒褐色を呈する。胎土は雲母粒を多く含む微砂粒で焼成は良好である。底部は回転糸切りによる切り離しで、体部は、直立気味な内側を呈し口縁部へ移行。
8. 4T耕作土中出土、口径10.8cm、底径5.1cm、器高2cmを測る。色調は内面、橙色を帯びる黄褐色、外面は、にぶい灰褐色を呈している。胎土中には粗砂粒を多く含んでいる。焼成は良好である。底部は回転糸切りによる切り離しで、体部は、緩やかに内側する。内面底部は指頭による撫を施している。

9. E-7 内出土、口径9.9cm、底径6.8cm、器高2.4cmを測る。色調はくすんだ赤褐色を呈し、胎土は微砂粒を多く含む。焼成は良好である。外面は荒れている。底部は回転糸切りの切り離しで口唇部に燈心痕が多数残る。体部はやや厚めの均一した器内で直線的に内凹する。
10. 3 T 耕作土中の出土の底部片で底径5.1cmを測る。色調は、褐色を呈し粗砂粒を含む。焼成は良好である。
11. E-7 内出土の底部片で色調、胎土、焼成ともに10に似る。
12. E-4 内出土の十ほどの破片で復元口径10.3cm、底径5.9cm、器高2.6cmを測る。色調は内面くすんだ褐色、外面褐色と黒褐色を呈し、胎土中には粗砂粒を多く含む。焼成は良好、体部は直線的に斜方向に開く。
13. E-5 内出土、十弱残存する。口径9.8cm、底径5cm、器高2.2cmを測る。色調は黄褐色を呈し、胎土中には粗砂粒を含む。焼成は良好、体部は下位より上位にかけて序々に内凹を強める。
14. D-8 内出土、口径11.5cm、底径7.9cm、器高2.8cmを測る。色調は褐色～暗褐色を呈し、胎土中には雲母粒を混える微砂粒を含む。焼成は良好である。回転糸切りによる切り離しで体部は直立気味に内凹するもので、口唇部は鋸り気味に丸めている。
15. 4 T 耕作土中の出土、口径7.6cm、底径4.5cm、器高1.7cmを測る。色調は内外面多様な色調を呈し、胎土中には粗砂粒を含んでいる。焼成は良好、回転糸切りによる切り離しの底部より体部は、斜方向に直線的に内凹する。
16. 3 T 耕作土中の出土の底部片である。
17. E-11 内出土、十残存する。口径7.8cm、底径4.9cm、器高1.7cmを測る。色調はくすんだ褐色を呈し、胎土中には粗砂粒を多く含む。焼成は良、口唇部に燈心痕が残る。回転糸切りの切り離しの底部より体部は斜方向に開き気味に内凹させている。
18. E-12 内出土、復元口径8.4cm、底径6.1cm、器高2.4cmを測り、器形は9に類似する。
19. E-8 内出土、墨書きを内面に記す底部小片である。
20. 5 T 耕作土中の底部から口縁部にかけての破片である。
21. E-4 内出土、復元口径7.5cm、底径5cm、器高2.1cmを測る。
22. E-3 内出土の口縁部片で復元口径は12.3cmで逆八の字状に開く体部で色調は淡い黄褐色を呈している。
23. E-12 内出土の小破片である。色調は赤褐色を呈する。
24. E-12 内出土の小破片である。色調は褐色を呈する。
25. E-5 内出土の破片で復元口径9cm、底径5cm、器高1.7cmを測る。13に類似する器形を呈している。
26. E-5 内出土、口径8.7cm、底径5.8cm、器高1.6cmを測る。色調は黒褐色と灰白色のまだらである。胎土は微砂粒を含む。焼成良、底径に比べて器脛が低い。



第9図 カワラケ実測図(1)



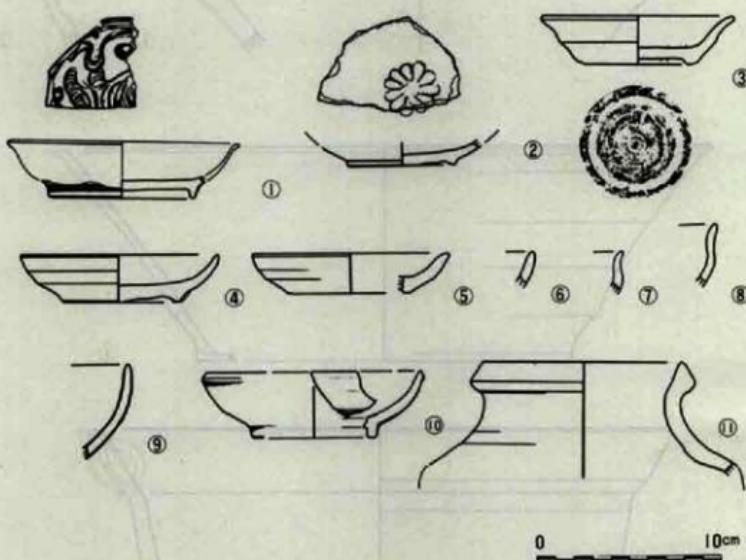
第10図 カワラケ実測図(2)

27. E-5 内出土、口径7.6cm、底径4.1cm、器高1.2cmを測る。色調は明褐色を呈し、胎土も精選され、焼成も良好で、底部に墨書きを記す。全体に薄手の作りである。
28. 3T耕作土中、口径7.9cm、底径4.2cm、器高1.5cmを測る。色調、胎土、焼成、器形も27に類似する。
29. E-5 内出土、口径7.7cm、底径4.2cm、器高1.6cmを測る。色調、胎土、焼成とも上記の2点と類似する。
30. 5T耕作土中出土、復元口径8.8cm、底径5cm、器高2cmを測る。色調は体部が赤褐色、底部と内面が黒褐色を呈する。

(3) 16~17世紀頃の出土遺物

1. 底径7.8cmを測る青花磁皿片で、土倉内入口部下層で出土。大胡城址関係で南曲輪出土について2点目の青花磁片である。
2. 内面見込みに菊花の押印が見られる灰釉皿で、11弁の菊花である。(4T耕作土中出土)
3. 鉄釉皿で、E-8 内出土。口径10.5cm、底径6.1cm、器高2.7cmを測る。高台は削り出しで、底部にはリング状焼台痕と内面には三点のトチ痕が残る。
4. 内面見込みに押印が見られる灰釉皿で、押印部は、釉留りとなり明確を欠いている。D-1にて出土したもので、口径10.8cm、底径6.3cm、器高2.6cmを測る。
5. 6は灰釉皿片で、5は復元口径10.3cm、底径6.5cm、器高2.2cmを測る。5は3T、6は5Tの耕作土中に出土したものである。
7. 8は所謂、天目茶碗の口縁部片である。
- 2~8は、15~16世紀に瀬戸、美濃地方で盛んに焼かれたものであろう。
9. 10は青磁片で、9は青紫色の釉で、10、12は灰緑色を呈し胎土は、灰色を帯びるもので口径11.5cm前後と定される。10は明代の製品であろう。(E-4 内出土)

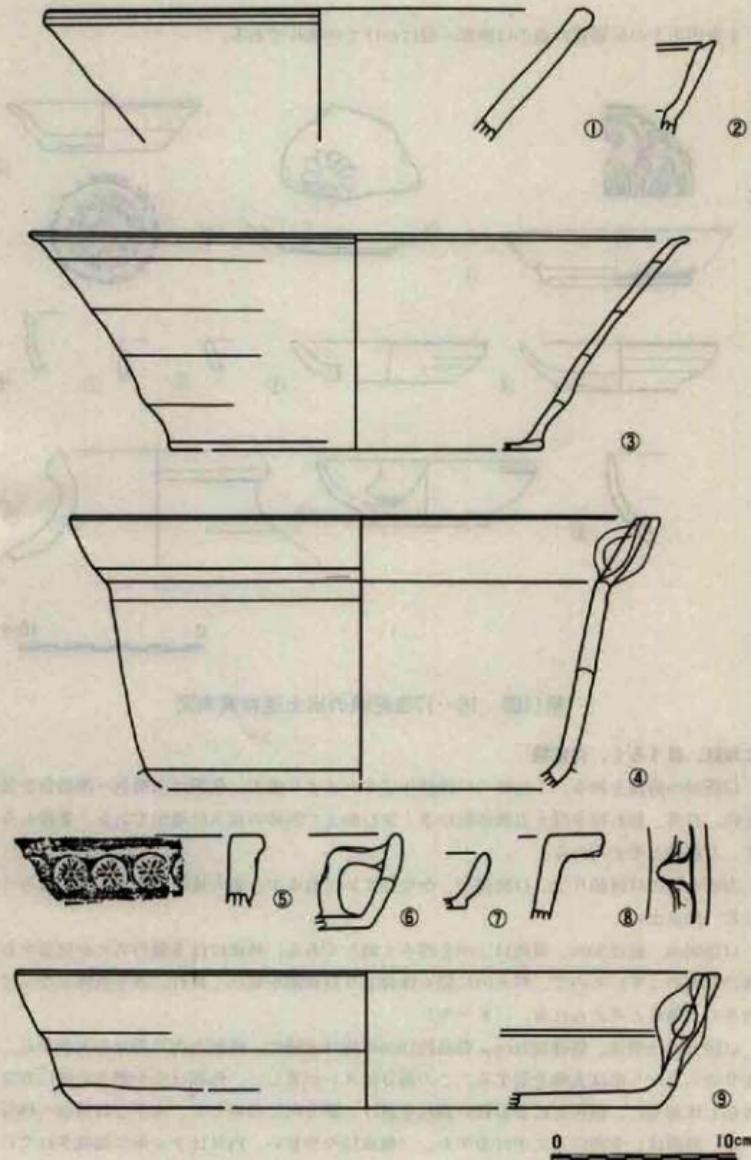
11. 土倉内出土の炉器質の壺の口縁部～肩にかけての破片である。



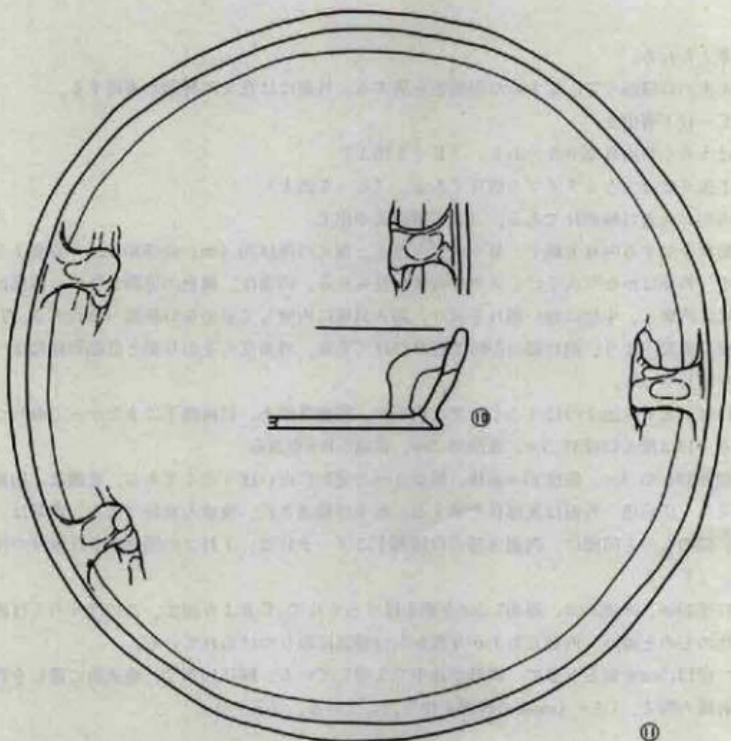
第11図 16-17世紀頃の出土遺物実測図

(4) こね鉢、ほうろく、火舎類

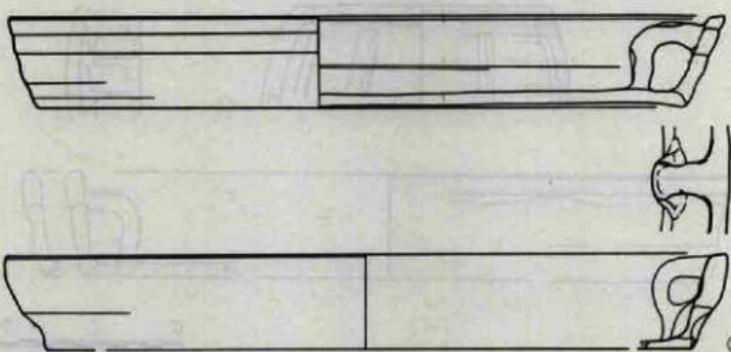
1. 口径29cm前後を測る。こね鉢の口縁部片でE-3より出土。色調は赤褐色～黒褐色を呈し雲母粒、石英、長石粒を混える微砂粒が多く含む胎土で粗砂の混入は僅かである。条線もみられず、こね鉢と考えられる。
2. 内耳土鍋の口縁部片で、口唇部が、かなりスレておるが、蓋の使用によるものであろうか。(E-12出土)
3. 口径36cm、底径20cm、器高約11.7cmを測る土鍋片である。外面には多量のススが付着する。全体に器肉のうすいもので、斜方向に開く体部より口縁部が短かく折れ、水平気味となっている。内耳の土鍋片と考えられる。(E-5)
4. 口径31.5cm前後、底径約21cm、器高約15cmの内耳土鍋で、底部と内耳部分を欠損する。底部より立ち上がり部は丸味を呈する。この部分はスレが著しい。体部はやや開き気味に直立し口縁部と体部境に、指押えによる軽い頬れを設け、斜方向に内側して、水平な口唇部へ移行している。外面は、全面にススが付着する。(焼成はやや甘い。内耳は3ヶ所に設置されていたと



第12図 こね鉢・ほうろく・火舍等実測図(1)



⑪

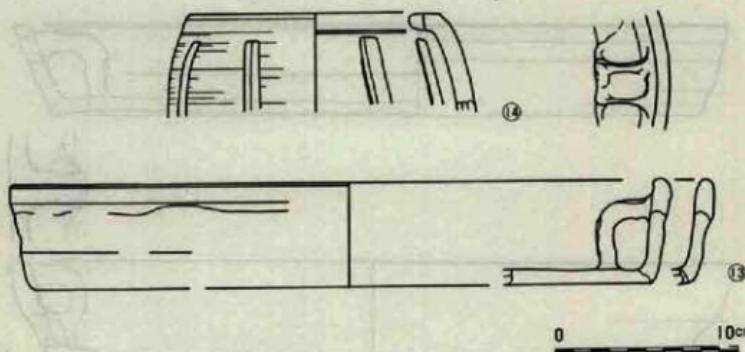


⑫

第13図 こね鉢・ほうろく・火舍等実測図(2)

考えられる。

5. 火舎の口縁部片で、くすんだ赤褐色を呈する。外面には花文の押印が連続する。
(E-12下層出土)
6. ほうろくの内耳部分片である。(E-5出土)
7. 小振りなほうろくタイプの破片である。(E-5出土)
8. 円型の火舎口縁部片である。(3T耕作土中出土)
9. 盤状を呈する内耳土鍋で、D-8より出土。復元口径は39.4cm、底径30.5cm、器高7.5cmを測る。外面はかなり火受けシスの付着が見られる。内面は、褐色の色調を呈す。体部は直立気味に内脅し、中位に軽い頸れを設け、開き気味に内脅して平坦な口唇部へ移行する。内耳は、内面口唇部下より、頸れ部にかけてとりつけてある。外面立ち上がり部と底部周縁部はヘラ押えを施している。
10. 13は、E-5出土のほうろく片で、内耳が、内面底部と、口縁部下にまたがって取りつけてある。13は復元口径35.5cm、底径33.5cm、器高5.8cmを測る。
11. 口径39~39.8cm、底径35cm前後、器高5cmの完形に近いほうろくである。色調は、内面、淡い褐色~灰白色、外面は黒褐色を呈する。胎土は精選され、焼成も良好である。内耳は、6、10、13のものと同様に、内面体部の口縁部下にアーチ状に、1対2の関係で3耳取りつけてある。(E-5)
12. 口径39cm、底径35cm、器高5.3cmを測るほうろく片で、E-8より出土。このほうろくは内耳が11他のものと違い、内面立ち上がり部から口唇部に取りつけられている。
14. 口径13.5cmを測る五徳で、脚部が途中で欠損している。脚は10本で、焼成前に透しを設け1cm前後の幅で、3.5~4cm幅の脚部を作り出している。(E-5)



第14図 こね鉢、ほうろく、火舎等実測図

(5) 猪鉢

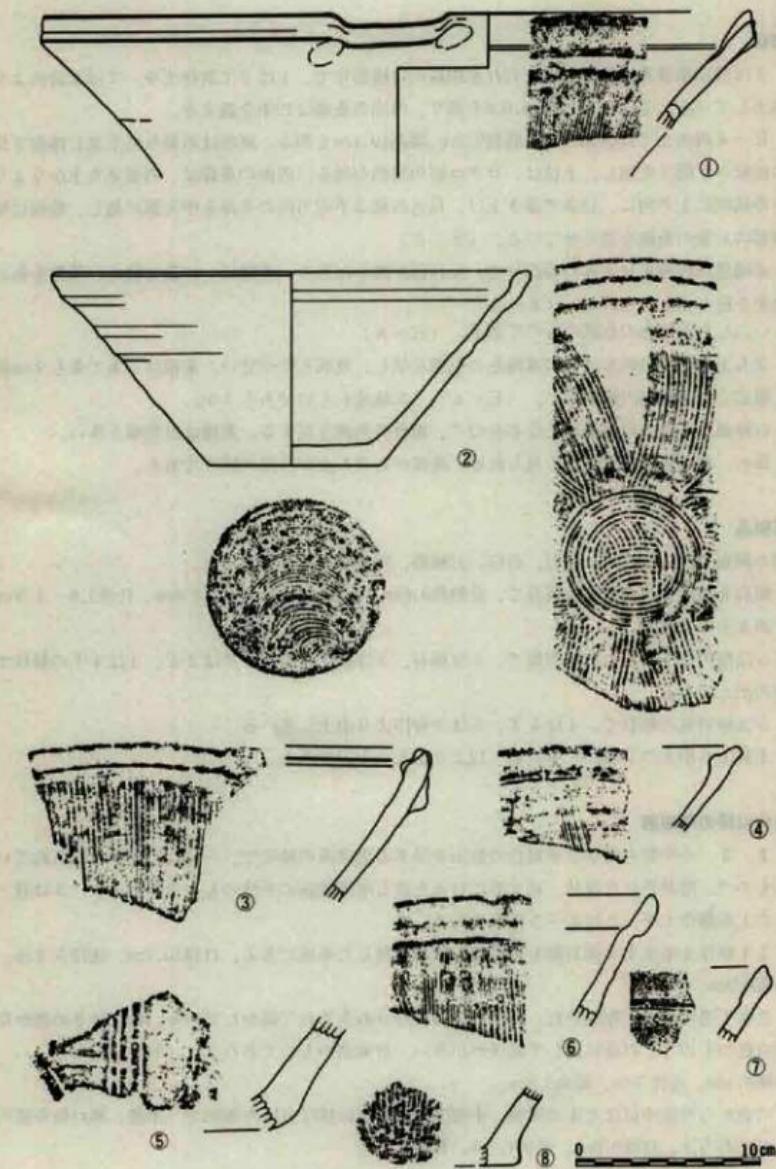
1. 7は所謂帶滑系のものと考えられる猪鉢の口縁部片で、1は2T耕作土中、7は土倉内より出土している。1は復元口径38.6cmを測り、内面の条線は12条を数える。
2. E-4内出土で口径26.3cm、底径9.2cm、器高10.1cmを測る。底部は糸切り底を呈し体部下位に回転ヘラ削りを施し、上位は、ロクロ痕の凹凸が残る。内面の条線は、内面立ち上がりよりやや弧状に上方向に、13条で搔き上げ、見込み部は不定方向の条線を中央部に施し、最後に周縁部に6条の条線を巡らせている。(E-5)
3. 赤褐色の色調を呈する口縁部片で、片口部が僅かに残る。条線は、10条を数え、条線を密に内面を巡らすものである。(E-5)
4. いぶした灰銀色の色調のものである。(E-8)
5. 立ち上がり部の破片で、淡黄褐色の色調を呈し、焼成もやや甘い。条線は4条で条も2cm強と幅広く、条線間の幅も広い。(E-4) 在地産のものであろうか。
6. 口縁部が体部と段違い状となるもので、褐色の色調を呈する。条線は21条線と多い。
8. 長石、長英等の混入が多く見られる。底部から立ち上がり部の破片である。

(6) 石製品

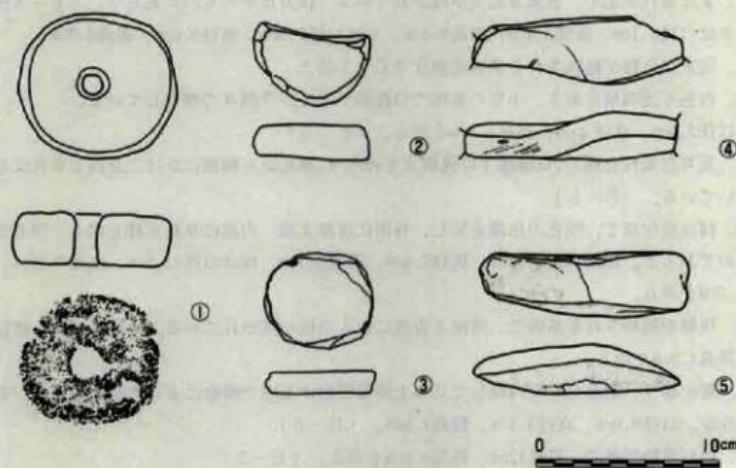
- 今回の調査での石製品は、砾石、石臼、五輪塔、円盤状石製品等が出土。
1. 軽石を加工した紡錘車状製品で、長軸径8.6cm、短軸径7.9cm、厚さ2.8cm、孔径1.8~1.5cmを測るものである。
 2. 3は橢円形を呈する石製円盤で、2は軽石、3は綠泥片岩で、2は2T、3は4Tの耕作土中の出土である。
 4. 5は砂岩質の砥石で、4は4T、5は土倉内より出土している。
 6. 土倉より出土の下臼。7. E-12より出土の上臼である。

(7) 近世以降の陶磁器

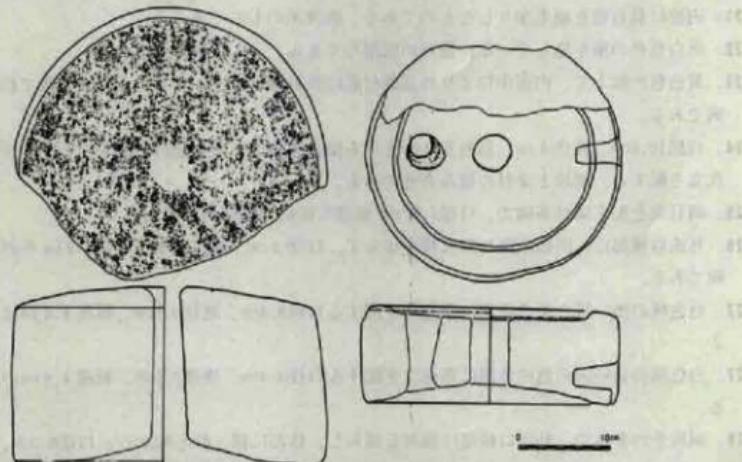
1. 2. 3. やや紫を帯びる赤褐色の胎土を呈する唐津系の鉢片で、一般に三島手と称されているもので、陰刻された波状、花文等に白土を塗る所謂象嵌の手法のものである。1. 3はH-1の上面耕作土中、2はE-5出土である。
4. 3T耕作土中出土の長石釉を疊付部を除き施釉した茶碗である。口径10.7cm、底径5.2cm、器高6.2cm。
5. 白色不透明の釉が施釉され、笹葉の文様がろうぬきされて描かれている。胎土はきめ細かな黄白色のもので、口径に比して底径が小さい。京焼系のものであろう。(E-5出土)
口径9.1cm、底径3cm、器高5.8cm。
6. 内面から外面中位ほどまで灰釉、中位下を鐵釉とに掛け分けた茶碗で、美濃、瀬戸焼系統のものであろう。口径9.8cm、底径4.2cm、器高5.8cm。



第15図 拙鉢実測図

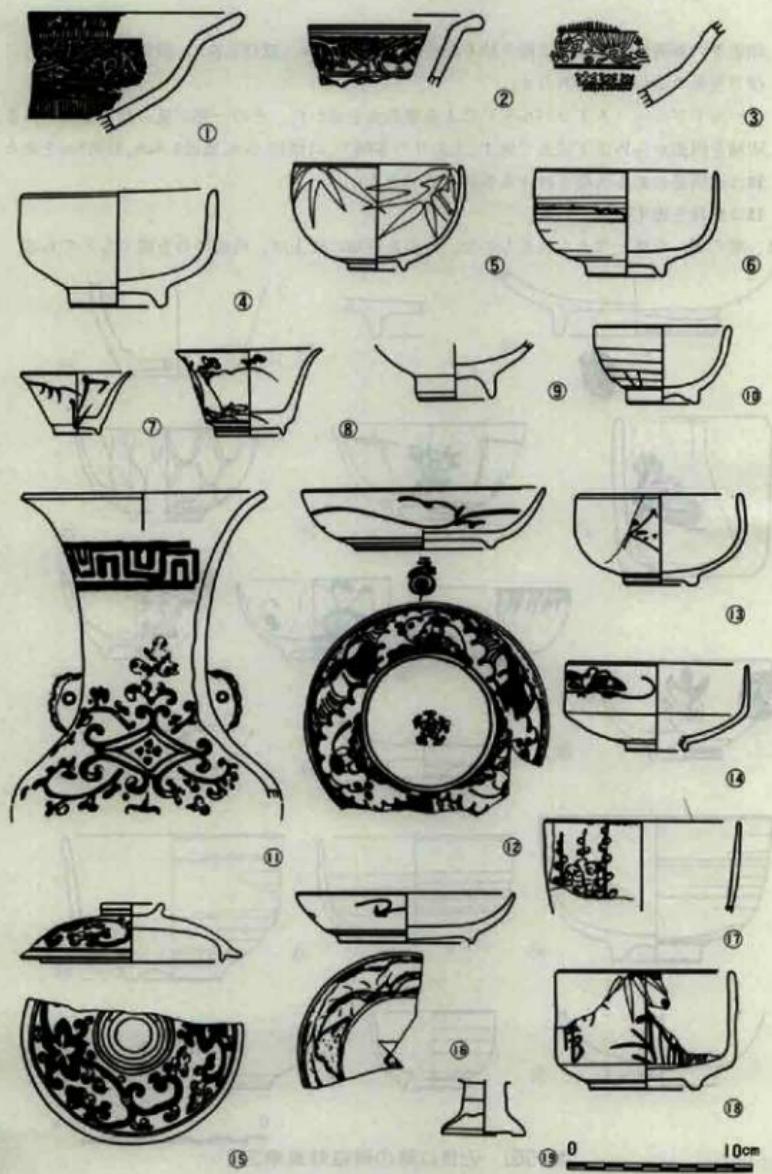


第16図 石製品実測図



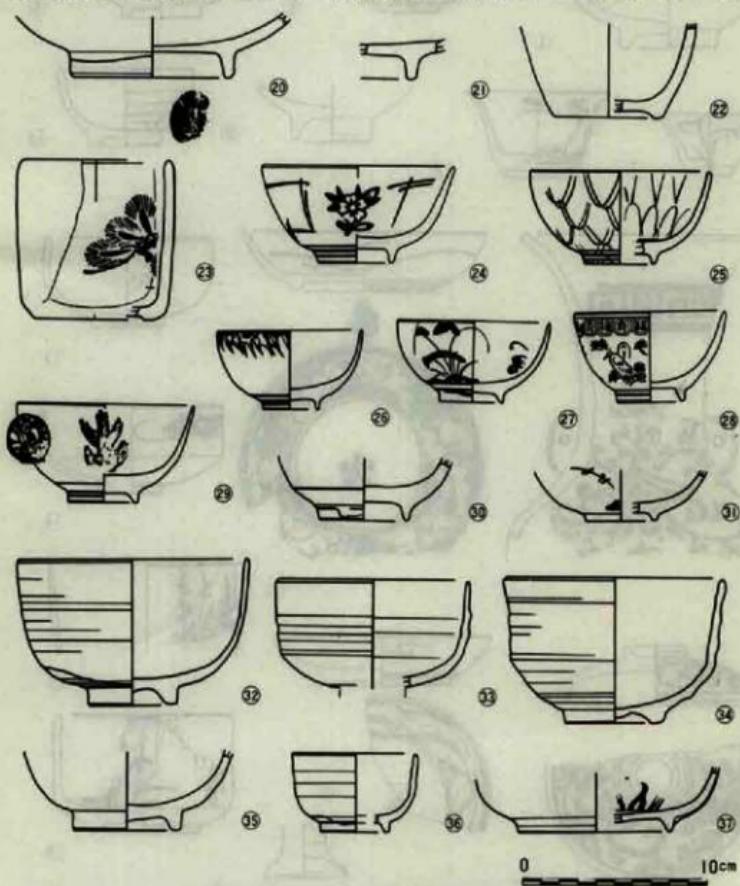
第17図 石製品実測図(2)

7. 8は染付皿で、竹葉草花文が描かれている、伊万里系のものであろう。（E-5出土）
7は口径6.1cm、底径2.4cm、器高3.4cm、8は口径7.9cm、底径3.6cm、器高4.7cm
9. 淡黄褐色釉が施釉される茶碗底部片でE-5出土。
10. 白色不透明釉を施す、小型の茶碗で口縁部下までヘラ削りで整形している。
口径7.5cm、底径4cm、器高4.3cmを測る。（E-5）
11. 双耳付染付花瓶で、口縁部下に連続文を巡らせ、頸部から胸部にかけ二分割で草花文を配し描いている。（E-5）
12. 15は染付皿で、灰色の色調を呈し、外面に唐草文様、内面に草花文様を描く、伊万里系のものであろう。12は口径13.3cm、底径7.4cm、器高3.3cm、15は口径11.9cm、底径7.2cm、器高2.7cmを測る。
13. 灰釉が施釉される茶碗で、銹釉と青釉による文様が描かれている。口径8.9cm、底径4cm、器高4.9cmを測る。
14. 腹が張り、胸部がやや内傾して立ち上がる器形の茶碗で銹釉によって松を描いているのだろうか。口径9.9cm、底径3.4cm、器高4.8cm。（E-5）
15. 染付蓋物の蓋で、口径12cm、器高3.3cmを測る。（E-5）
16. 胸部と黄白色釉と灰色釉に掛け分け黄白色釉部に草花文を描く。
18. 腹が張り胸がほぼ直立する筒形の茶碗で、灰釉を掛け、銹釉と淡緑色釉で菖蒲、文字、竹葉を描いている。口径9.7cm、底径5.9cm、器高6.5cm。
19. 脚台付盃の脚部片であろうか。
20. 淡い灰色の胎土に、にごった黄褐色釉を施釉するもので、底部に清多の押印されている。
21. 内面に長石釉を刷毛塗りしたものである、唐津系のものであろう。
22. 灰白色系の釉を施している。徳利の底部片である。（4T耕作土出土）
23. 黄白色の胎土で、内面中位より外面疊付部に長石釉を掛け、青色釉と淡緑色釉で松を描く茶碗である。
24. 口径10.6cm、底径4cm、器高5.3cmを測る染付茶碗で、灰白色の色調を呈し、3分割で、草花文を配する。刷絵と染付の組み合せである。
25. 網目文を配す染付茶碗で、口径7.9cm、底径3.8cm、器高5.1cmを測る。
26. 外面口縁部に、所謂雨降り柳文様を巡らす。口径8cm、底径3cm、器高4.3cmを測る染付茶碗である。
27. 白色味の強い灰白色の色調に草花文を配する口径8.4cm、底径3.5cm、器高4.4cmの茶碗である。
28. 白色味の強い灰白色の色調に草花文を配する口径8.4cm、底径3.5cm、器高4.4cmの茶碗である。
28. 銅版手の茶碗で、外面口縁部に福寿を巡らし、体部に鶴、松を配する。口径8.3cm、底径3.6cm、器高4.9cmを測る。明治初期のものと考えられる。（表採）



第18図 近世以降の陶磁器実測図(I)

29. 印版手の茶碗で外面体部に鶴と松を配する。口径9.6cm、底径3.8cm、器高5.4cmを測る。
30. 伊万里系の染付茶碗であろう。
31. コバルトブルー（人工コバルト）による草花文を描かれ、その一部が見られる茶碗である。
32. 灰釉を内面から外面下位まで施す、大ぶりの茶碗で、口径12.6cm、底径4.8cm、器高8cmを測る。
33. 36は透明感のある灰釉を掛ける茶碗と盃であろう。
34. 35は鉄釉を施す茶碗である。
- 37は、腰の張った鉢と考えられるもので、外面を青磁に仕上げ、内面に竹を描くものである。



第19図 近世以降の陶磁器実測図(2)

6. 酒井家資料について

この資料は、山田武磨先生が調査され、丸山知良氏よりコピーをいただいたものである。

資料考察

資料中には、この資料年代を検定できる人物が、数名掲げられる。

- 大河内体軒は大河内二右衛門の嫡男勘兵衛広種の子、勘兵衛広継であり、宝永元年（1704）九月十七日没、休軒と号した。
- 勅使河原藤兵衛、阿閉庄衛門（阿閉庄左衛門）は、宝永二年（1705）將軍綱吉の右大臣昇任に当って、將軍上洛に酒井忠拳が供養した時の隨從者名に見られる。
- 森平八郎（森平八）は、直泰夜話、六巻に、元禄十一年（1698）上の御林御預りとして、見られる。

この内、大河内休軒が、宝永元年に没している為、元禄期の末頃の年代が考えられよう。

酒井家資料 大胡城下図

この絵図は、93m×133mの大きさで、酒井氏時代の大胡城下絵図と考えられるものである。

絵図は、東は荒口川、（荒砥川）から現在の殿町地区西の低地、北は、金胎寺（現・金藏院）南は、長興寺までを描写したもので、城郭部、町割りを正確に描くものである。先ず城郭部を観察すると、三の丸、南曲輪、西曲輪、根古屋を結ぶ空堀道には、門址であろう建物、西曲輪にはさらに、石垣を描いている。上記した内、根古屋の石垣をもつ屋敷跡は、絵図面中侍屋敷地域にもなく、重要人物が、存在していたのであろうか？また、荒砥川の氾濫を防げる為のものであろうか、牧野氏は、近世城郭として大胡城を整備する過程で虎口を石垣で構成する特徴があり、牧野氏の屋敷跡をこの根古屋に設けたのであろう。三ノ丸と南曲輪の堀切り道に設けられた門址は、城郭部と侍屋敷、町家からの出入りに重要な道であった事が推察できよう。侍屋敷址は、主として現在の小字名、殿町に集中し、前橋、大間々、桐生線以北より、養林寺北側道路の西面に集中しており、前橋道から沼田道に折れる地点と、養林寺北西十字路には、木戸が存在し、侍屋敷出入口を示している。この侍屋敷地内には、三ヶ所の長屋が存在する。また、水路の整備も明確に描写している。町家は、本町を中心とする地域に比較的の整然と区画を施し、道路の中央に流れる用水も、風呂川より導き入れている状況が判る。この本町は、根古屋の手前で、直角に折れ、現在の大川橋付近で屈曲している。この直角に折れる町角には、高札が置かれている。この絵図には、漆畠が描かれている。前橋藩では、文政五年（1822）に赤城山に漆畠を植付しているが、大胡在住の家臣等の殖産興業の一端として、大胡城内の空間地を利用して、栽培していたのであろうか。

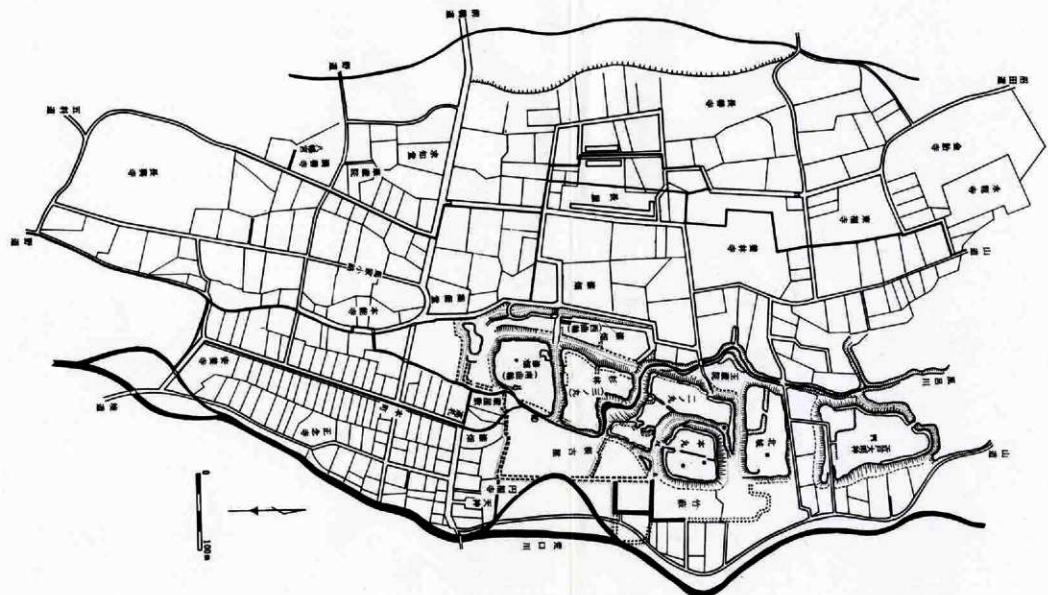
では、この絵図はいつ頃のものであろうか？

先ず、求知堂が描かれている為、1700年頃のものである事が判る。そして、酒井家資料・38の人名と同一人物が数多く見られると共に、御竹林が、開墾され、山上新左衛門の区分としている

元禄期大胡城内屋敷割（酒井家資料38）

区分	坪数	区分	坪数
籠谷弥市左衛門跡	1377	同人抱	362
御林	1179	同人抱	472
村田弥左衛門跡	1683	成瀬弥五左衛門	671
御杉林	548	勅使河原藤兵衛	940
村上源太左衛門	1015	●樺木権兵衛拌領	内300
矢内兵左衛門	756	●鈴木角之丞	581
●町田喜左衛門	467	同人抱	247
●籠谷市之雄	907	御竹林跡	663
秋間源左衛門	885	同断	532
北条?	1120	同断	612
●勅使河原八郎左衛門	518	勅使河原新右衛門	1137
●戸塚武太夫	934	松崎弥兵衛	500
●坪沼金右衛門	250	大河内休軒	1537
同人抱	165	●永井弥市	690
武井市郎右衛門	192	御竹林	589
木戸三四郎	498	大痴跡屋敷御竹林減	205
●村井長右衛門	856	井田弥太夫	691
籠谷茂兵衛	435	同人上屋敷(大河内休軒)山上新左衛門預り	551
●奥村与市左衛門	472	新美甚左衛門跡	967
塙原十左衛門	357	●山上新左衛門跡	350
●林郷太夫	463	●武田宋闇	812
森平八郎(森平八?)	396	●思田次左衛門	385
滝沢五郎兵衛	553	●赤堀六右衛門	385
大塚又内跡	599	●安藤源五左衛門	651
滝沢五郎兵衛(ママ)	231	同人抱	165
阿閉庄衛門(阿閉庄左衛門?)	731	的場	822
●清野太郎兵衛	856	●安井玄賀	680
●小笠原助之進	666	高尾友信	989
同人抱	中損(300?)	田中武兵衛	438
勅使河原四郎左衛門	1410	川端権兵衛	81
上原兵藏	350	久保左衛門	1041

(注) ●印は、資料38と絵図面で人物名が一致するもの。



第20図 17世紀前後の大胡城下図（発掘調査に基づく資料付）⑥

可能性が、坪数等の比較より考えられ、酒井家資料38よりも後のものであるが、さほど時間差を経ていない、18世紀前半のものであろう。

この絵図は、現在の地籍図と比べても、さほど変化なく、大胡町が、牧野、酒井氏支配の状況下に、急変する事なく、今日に至っている事を知る好資料である。

(注)大胡城下絵図は前橋市教育委員会福田紀雄氏の御好意により資料提供を受けたものである。

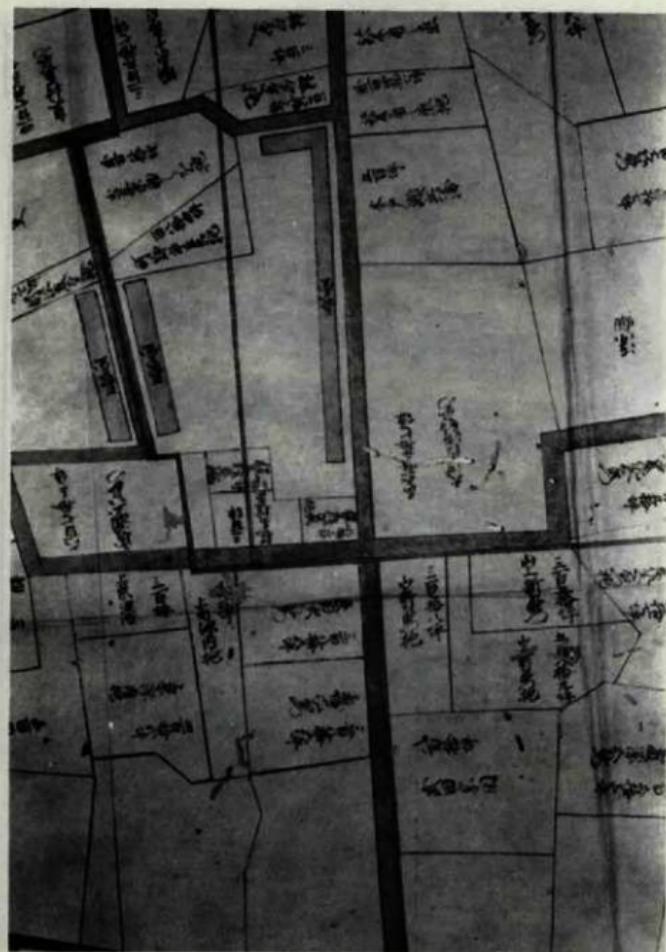
7. 結 語

今回の発掘に於いて、牧野氏時代から酒井氏支配下の武家屋敷跡、並びに長屋跡を調査致しましたが、遺構面まで深く耕作が入り、その存在を確認するまでには至らなかった。しかし、その存在を裏付ける井戸址、土倉、柱穴等が検出されると共に、酒井家資料によって一層当時の状況把握がなされた。今後、近現代の遺跡を調査する事が頻繁化するにつれて、古文書、絵図等の対応が必要になり、総合的な地域把握から調査を推進しなければならない。

本圖は大胡城の城下町の絵図である。左側に大胡城の本丸と二ノ丸がある。右側には、城下町の町並みが示されている。



大胡城下絵図（酒井家資料）



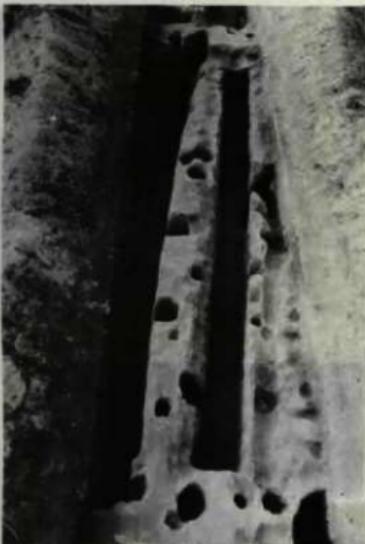
大胡城下絵図（調査地点付近）



調査区全景



1T(東側より)



2T(イモ穴状掘り込み)



1,2T(南西方向より)



2T, E3周辺



2T, E4, JD1付近



2T, E3付近



3T 東側 E6,7等



3T(東側より)



3T 東側地区



灰釉陶器出土状況



D3 (南側より)



D2 (北側より)

PL7



3T (西側より)



D5, E8 (東側より)



H-1 (北西方向より)



長頸壺出土状況



土 倉(入り口部)



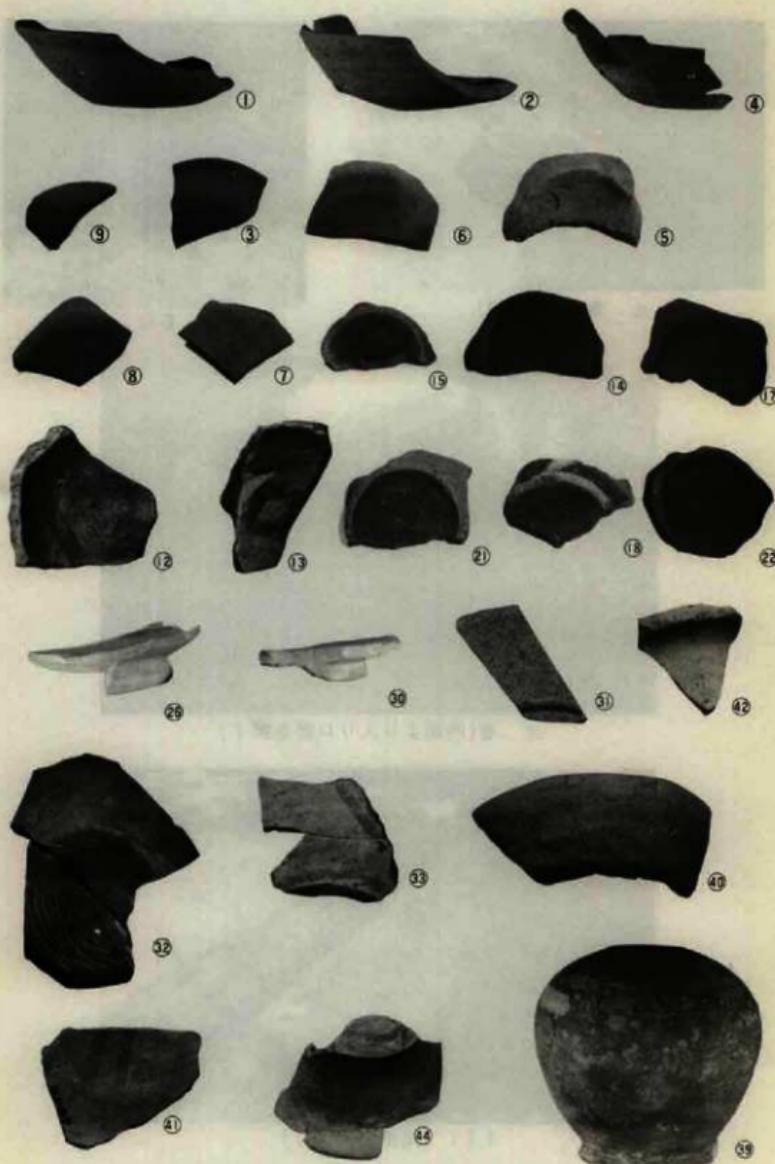
E II



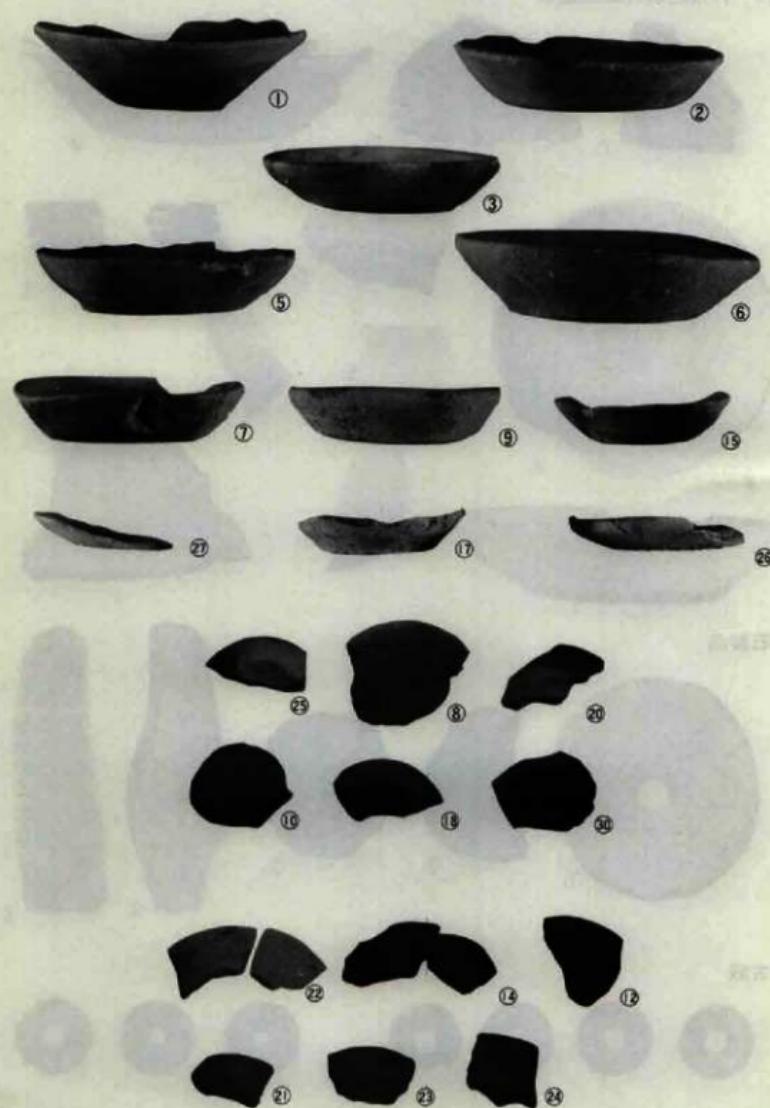
土 倉(内部より入り口部を撮す)



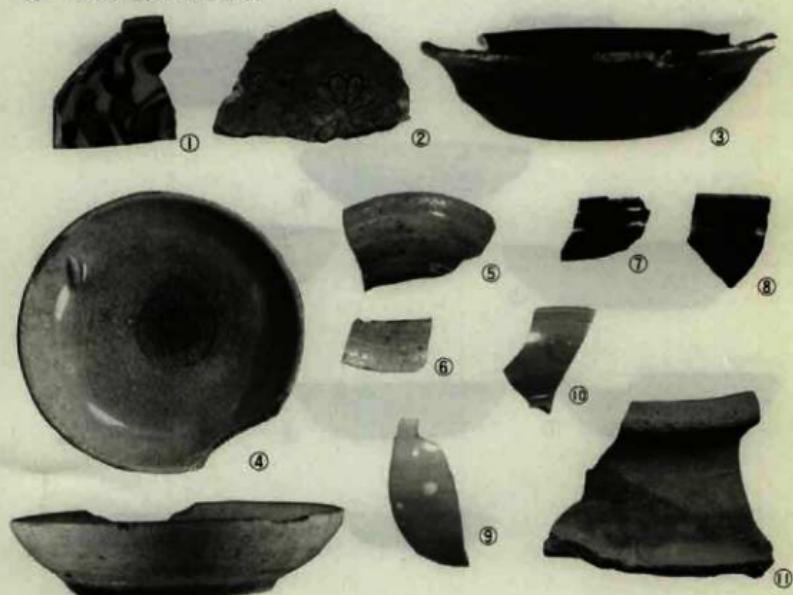
4,5T (南東方向より)



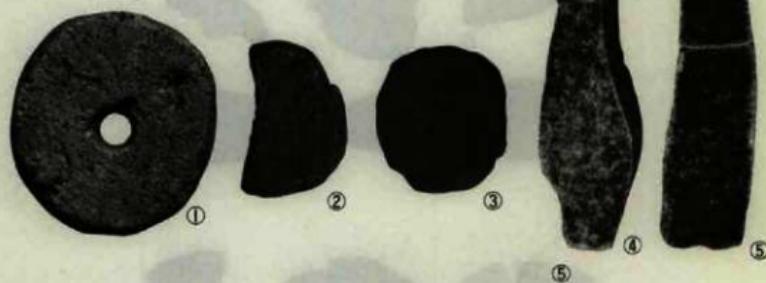
平安時代の出土遺物



16~17世紀頃の出土遺物



石製品

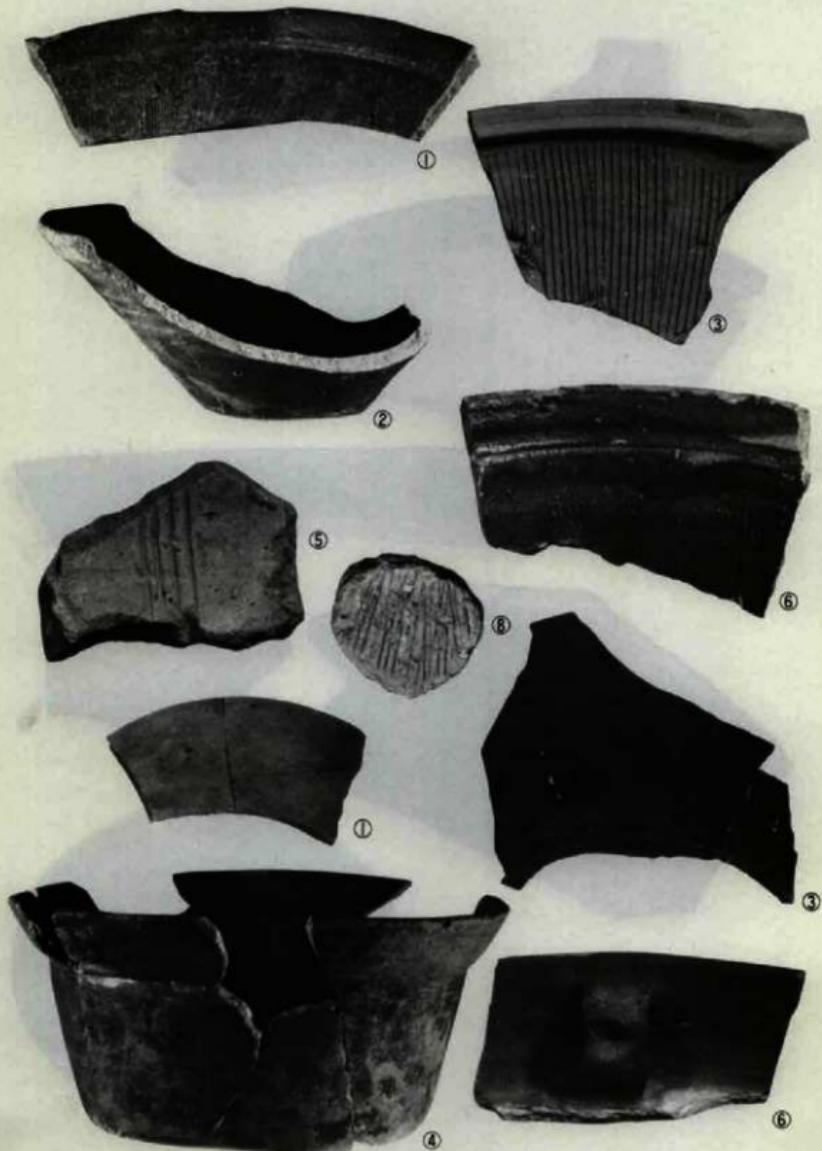


古銭

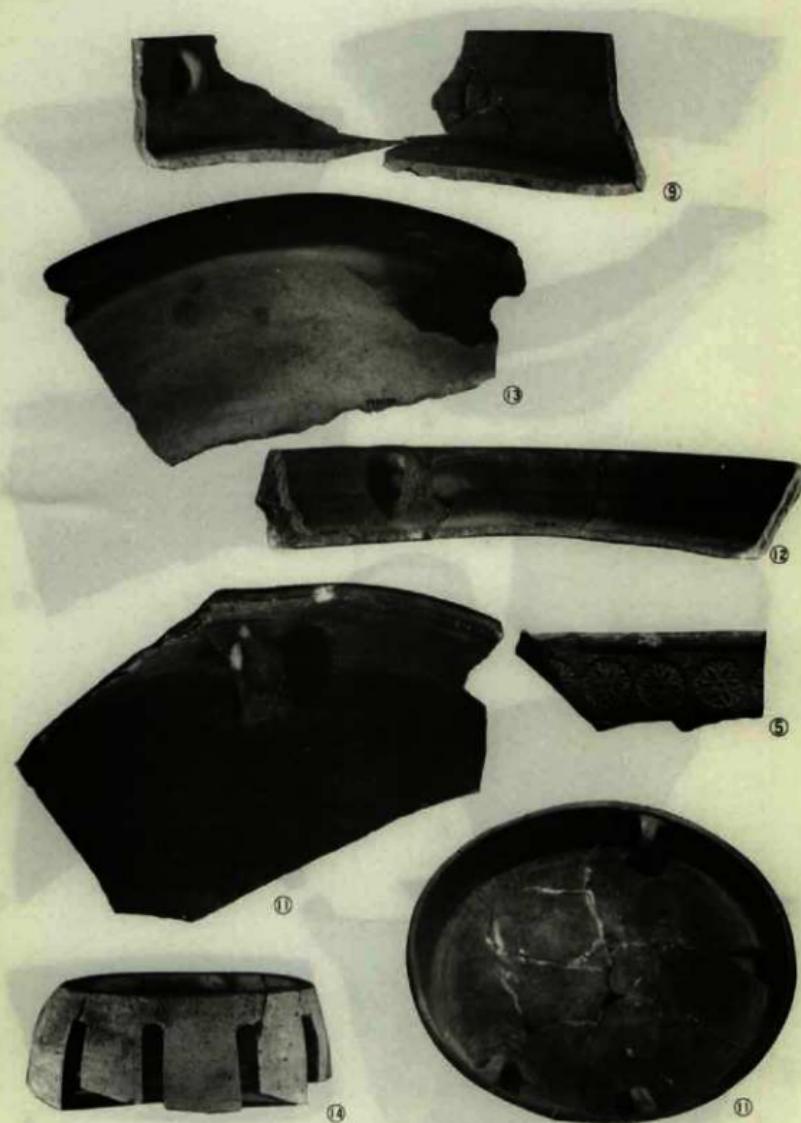


E 4出土の古銭

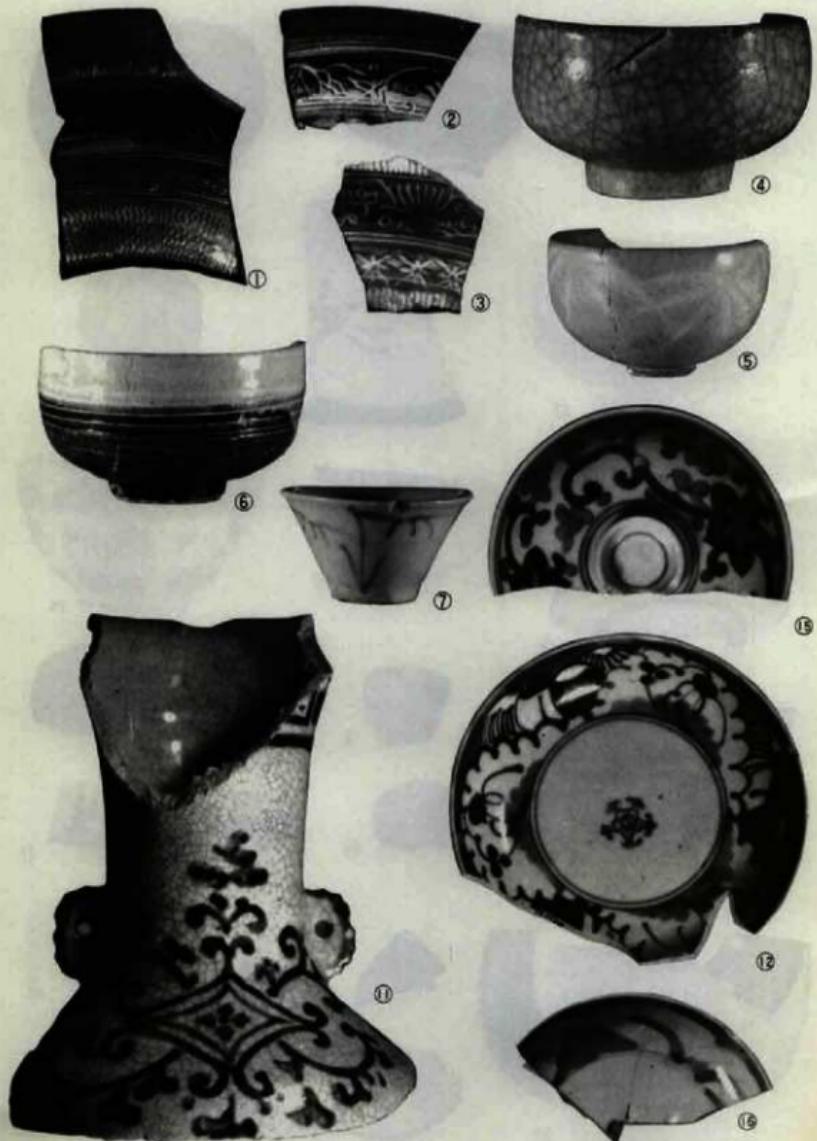
E 7出土の古銭



摺鉢、こね鉢、土鍋、ほうろく



ほうろく、火舍、五徳





近世以降の陶磁器

殿町遺跡発掘調査報告

1983. 3. 31

編集 大胡町教育委員会 山下誠信
発行者 大胡町教育委員会
印刷所 日吉印刷株式会社